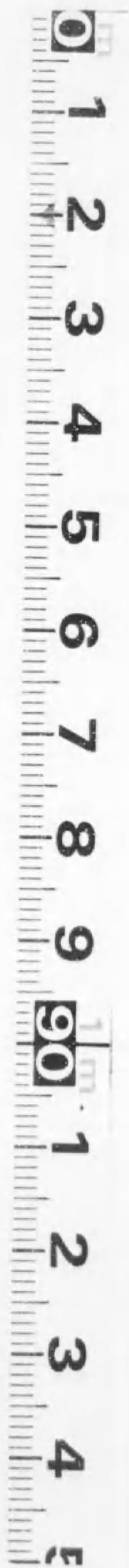
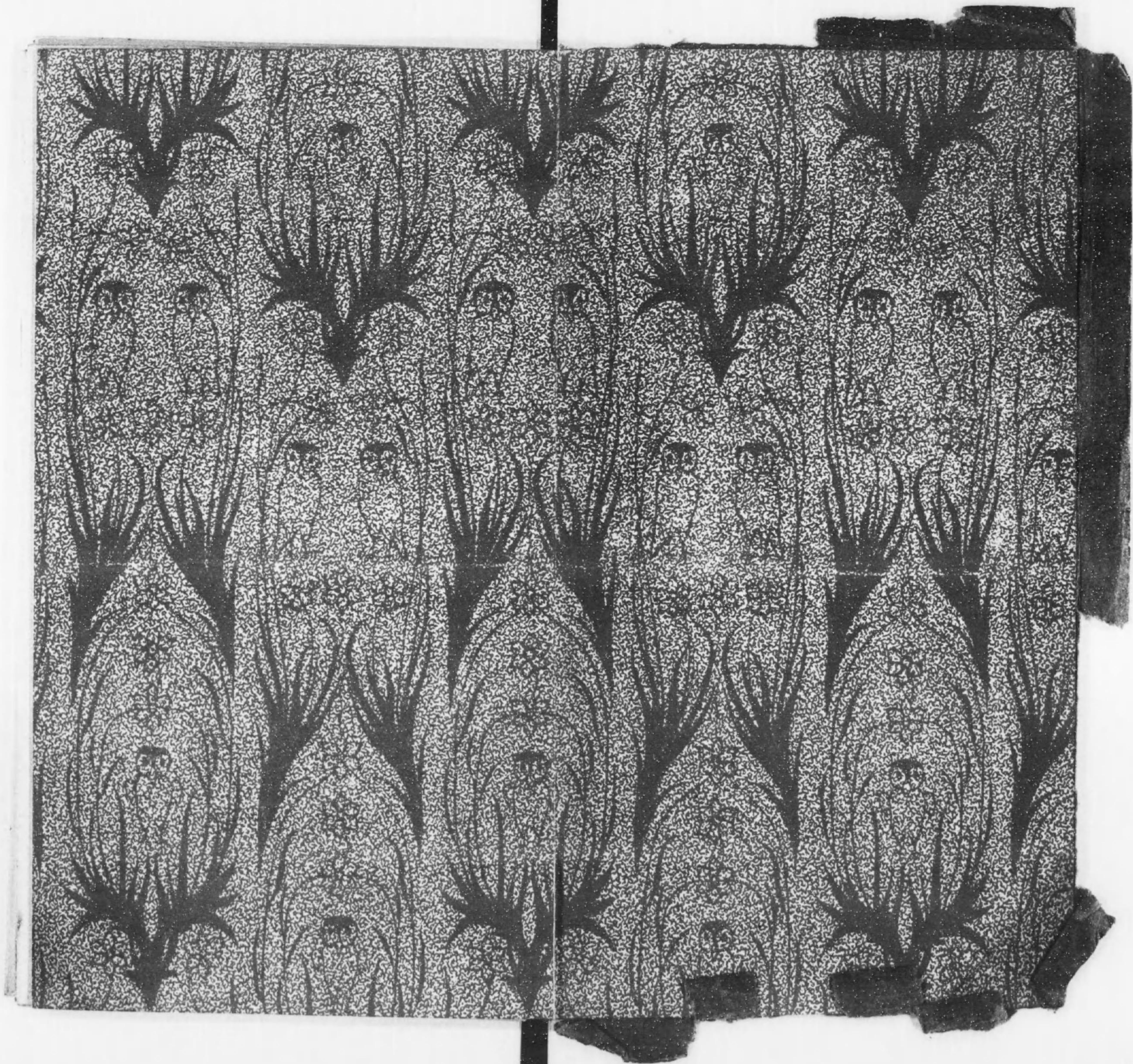


夜曲



始





特109

484



現代文藝叢書

第七編

內容



鼠白夜

き

鼠

大正
1.11.26.
内交



曲 戲
夜

(三幕)

人物

老坑夫、大澤次郎。

次郎の娘、おせつ。

鑛山の持主、澁川勝彌。

勝彌の娘、静緒。

鑛山技師、原田友彦。

若き坑夫、内海十藏。

この外數十人の坑夫出づ。

場所

北國の或る鑛山。

〔戯曲〕夜

〔戯曲〕夜

現時代
今。

第一幕

この幕を以てこの戯曲の PROLOGUE とす。或る鑛山の一部。人をして「何處より來り何處へ往く」と思はしむる山脈の斷層は、右方より突出して殆んど舞臺の大部分を占む。その姿は遂に何者の闖入をも許さざる「永遠の壁」の如く、それに向つての長き凝視は、怖しき不安と、怖しき鬱憂と、怖しき懷疑とに、我等が心を誘はむとす。岩石の色はすべて黒く、岩石の形はすべて鋭し。

その斷層の中央に鑛坑の入口あり。殆んど掘り盡して廢坑に近く、その内部の暗黒は死よりも冷たし。鑛石を運搬する爲めに設けられたる二軌の鐵路は、鑛坑を出でて右方に走り去る。鑛坑の右方に顛覆せる二臺の運搬車あり。その附近には灰白色の鑛石夥しく散亂す。

草なく木なし。唯この痛ましき場景の中において、微かながらも心の顛慄を強ふるものは、斷層の左方より遙かに望み得る湖の深碧なり。黄なる雲冷たくその上に横はりて、薄暮の光を仄かに水面に投ぐ。

十一月の終に近き日。風なき夕。

徐ろに起ち上れる「夜」は、その大いなる黒き手に或る運命を掴み來りて、我等が前に示さむとす。

〔戯曲〕夜

〔幕の静かに上りし時、舞臺は數十人の坑夫を以て滿されたるを見る。或は立ちて腕を組みたる者あり。或は岩壁に凭りて眠れる者あり。或は運搬車に腰懸けて烟草を吸ふ者あり。或は踞みて土に何事か畫く者あり。或は歩みつつ慵うげに獨語する者あり。或は地上に横臥して冷かに笑ふ者あり。或は恍惚として遠く湖を眺むる者あり。或は坑口に佇みて密かに暗黒なる内部を窺ふ者あり。或は數人圓形に座して博打つ者あり。或は二人一塊の麵麴を争ふ者あり。或は唯一人群を離れて頻りに石を擲つ者あり。或は——。或は——。かくて彼等は、極めて混亂せる極めて放縱なる極めて自由なる状態にあり。されどその中心には、次第に彼等を統一せむとする「夜」の思想の横はれることを豫想せざる可からず。暫時沈黙。最も左手に集まりし一群の坑夫等は、すべて同時に左方の山腹を望み見る形を示す。〕

坑夫等の聲

○やあ。次郎が遣つて來るぜ。

○まるで這うやうにして登つて來る。

○何しに出懸けて來たんだらう。

○やつ。石に躓いて倒れたな。

○おお。直ぐ起き上つて歩き出した。

○よく見る。手に何か攪んでゐる。

○よく聽け。何か云つてるぢやないか。

○あわ。岩の蔭になつてしまつた。

○もう直き此處へ遣つて來るだらう。

〔舞臺上の坑夫等はすべて左方の山腹を望む。〕

坑夫等の聲

○もう次郎は幾歳になるだらう。

○何しろあの白髪だからなあ。
○おお。見ろ。見ろ。
○次郎はあの岩の上に出て来たせ。
○如何してあんな所へ登つたらう。
○やつ。手は血だらけになつてゐる。
○やつ。足も血だらけになつてゐる。
○おお。またあの岩を駆け下りたせ。
○氣が狂つたのかな。
○うん。氣が狂つたのかも知れない。
○ああ。また石に躓いた。

○今度は中々起き上らないな。
○死んぢまつたんぢやないか。
○いや。やつと起き上つた。
○疑つとこつちを見てゐるせ。
○何か云つてるが聽えない。

〔暫時沈黙。微かに呼吸も絶え絶えなる叫び聲を聽く。何事を語るとも知れず。唯「おおい」と云ふ如く響き来る。〕

坑夫等の聲

○おお。あんな崖を駆け登つて来る。
○まるで獸のやうだな。
○何處でもかまはず登つて来るのだ。

○何時もの次郎とはまるで違つてゐる。

○もう直ぐ其處に來た。

○おお。もう直ぐ其處に來た。

○やつ。立留つたな。

○さうして何か怒鳴り始めたな。

〔暫時沈黙。左方の山腹より皺喰れたる聲斷續して聴ゆ。〕

次郎の聲。(咽喉裂くるが如く)……………皆聽いて呉れ……………嘘ぢやない……………は
んとは己がこの山を見付けたのだ……………己がこの山を見付けたのだ……………

〔坑夫等の中には慘酷なる微笑を浮ぶる者あり。〕

次郎の聲。(前よりも近く)……………皆聽いて呉れ……………それをあいつが盗んだ
のだ……………だから己は如何しても取り返す……………己は如何しても取り
返す……………

〔坑夫等の中には急に驚愕の眼を見張る者あり。〕

次郎の聲。(極めて近く)……………皆聽いて呉れ……………今まで黙つてゐたのだ……………

……………併しこの山は己のものなのだ……………この山は己のものなのだ……………

〔坑夫等の中には眼を見交はして頷き合ふ者あり。やがて群集は道を開くもの如く、次第
に右方へ雪崩れ寄る。暫時して左手より老坑夫大澤次郎出づ。六十二三歳位。白髪。坑内
にて用うる黒き桐油の仕事を纏ふ。全身土に塗れ、手も足も傷を負ひて血に染む。片手
に何物が堅く握れるを見る。〕

次郎。(立留りて群集に對す。)おい、皆己の云ふことを聽いて呉れ。今日まで己
は誰にも話さなかつたのだ。併しこれを誰にも話さずにあると云ふこ

とが、己には如何しても出来なくなつたのだ。(嗟嘆す。)己がこのことを話さずに死んでしまふと、この秘密は誰にも分らずに、己の生命と一所に葬られてしまふのだからなあ。

一人の坑夫。その秘密と云ふのは如何なことなのだ。

次郎。まあ静かにして己の云ふことを聽いて呉れ。(高く片手を上げて握りたる何物かを示す。)これを見る。これを見る。己はこの手にその秘密を握つてゐるのだ。さうしてこの手に握つてゐるのは、唯秘密ばかりぢやない。世の中のあらゆる苦痛とあらゆる悲哀を握つてゐるのだ。今までこれは己の懐の奥にそつと隠して置いたのだが、もう己にはこの儘誰にも知らせずにあると云ふことが出来なくなつたのだ。

他の一人の坑夫。おい、次郎。早く秘密を話さないか。

次郎。まあ待て。まあ待て。(間。)これを話すのには、先づ己の若い時分のことから云はなければならぬのだ。己は何處で生れたか知らない。さうして己は誰の子だかそれも知らない。誰己の知つてゐるのは、子供の時分から鑛山の坑の中で育つたと云ふことだけなのだ。(湖の方を指差す。)あの湖の向ふに二三十里往くとやつぱりこんな鑛山がある。己はその鑛山の坑の中で二十五六になるまで育つて來たのだ。さうして己は何時の間にか金はどんな匂がするものだと言ふことが分るやうになつたのだ。

他の一人の坑夫。(笑ふ。)金に匂があるものかい。

次郎。そんなことを云ふから何時もお前達は駄目だと云ふのだ。(間)それから己は何か旅をしなければならぬことが出来て、たつた一人での山を歩いてゐたと思へ。(四邊を見廻す) おお。丁度この所だ。この所で己は金の匂に出會つたのだ。己はその時まるで狼のやうに地を嗅いで喜んだのだ。さうして急いで土を掘り始めたのだ。(鑿坑を凝視す) おお。丁度その坑の所を掘り始めたのだ。

他の一人の坑夫。秘密と云ふのはそんなことなのか。

次郎。如何してこんなことぢやない。もつと怖いことなのだ。(間)それからと云ふものは、夜も晝も休まずに毎日毎日掘り續けた。たつた一人で黙つて掘つてゐると、持つてゐる鎚も自分のではないやうになつ

て来る。直ぐ傍の岩を碎く音も遠くに聽えるやうになつて来る。今まで前にあつた石壁も遙かに彼方に見えるやうになつて来る。金の匂がだんだん強くなつて来たなと思つたら、己はその儘其處にばつたり倒れてしまつたのだ。

他の一人の坑夫。氣絶をしたのか。

次郎。さうだ。到頭氣絶をしてしまつたのだ。(間)それから氣が付いた時には、己はもう今日のやうな身になつてゐたのだ。丁度その時通り懸つた旅商人が、不圖この坑を見付けて中に這入つて来たのだ。さうして氣絶してゐる己を助け出して呉れたのだ。(暗示的に)その旅商人を誰だと思ふ。

（坑夫等は顔を見合はせたるのみ。一人のこれに答ふる者なし。やや長き間。……この時正面の鑿坑の内部に一點の火光現はれ次第に近付き来る。舞臺は漸く暗黒ならむとす。）

次郎。その旅商人は今この山を持つてゐる澁川勝彌だつたのだ。あいつが己の見付けたこの山を盗んだのだ。己にこの通り圖面を書かせながら何時の間にか自分のものにしてしまつたのだ。さうしてその時あいつはこの坑の中にあつた己の金塊を奪つたのだ。それを元手にしてこの山を掘り始めたのだ。（苦しげに呼吸す。）

（坑口に若き坑夫内海十藏現はる。二十三歳位。老坑夫と同様に仕事着を纏ひ、片手にカシメの灯を提ぐ。鋭き眼。短き髭。坑口に立ちて密かに老坑夫の物語を聴く。）

次郎。まあよく見ろ。これはもう四十年も前の圖面だけれど、持主として

ちやんと己の名が書いてあるのだ。己が何にも知らないのを好いことにして、あいつは己を欺かしたのだ。（痛ましく首を振る。）いいや、己は如何しても取り返す。己は如何しても取り返す。（蹠跟として右手に歩む。）

（坑夫等速かに騒ぎ始む。）

坑夫等の聲

○何處へ往くのだ。

○何處へ往くのだ。

○次郎。怖しい秘密は。

○秘密と云ふのは何なのだ。

○手の血を拭くが好い。

○足の血を拭くが好い。

○次郎。怖しい秘密は。

○秘密と云ふのは何なのだ。

〔群集は左方に雪崩れ寄る。老坑夫は右手に來りて立留る。〕

次郎。(振返りて群集を凝視す。)怖しい秘密がそんなに聴きたいのか。(間。)それはあの旅商人が、己をこの坑へ生き埋めにしようとしたことだ。

〔老坑夫は踰限として右方に去る。坑夫等は何ものにか歴せられたる如く沈黙せるまま動かず。暫時して漸く言語を發する者あり。〕

坑夫等の聲

○もう何處へか往つてしまつたな。

○もう何處へか往つてしまつたな。

○この眞つ暗な坑の中へ。

○あの男は生き埋めにされ懸つたのだ。

○ほんとにこんな怖しい秘密が。

○よくまあ知れずにあつたものだ。

○何故今まで黙つてゐたのだらう。

○何故今まで黙つてゐたのだらう。

〔一人の坑夫は坑口に立てる若き坑夫に氣付く。〕

一人の坑夫。其處に立つてゐるのは十藏か。

十藏。(二三歩進み出づ。)うん。己だ。

他の一人の坑夫。次郎の話を聴いてゐたのか。

十蔵。うん聽いてゐた。(快活に笑ふ。)何が怖しい秘密なものか。あんなことは何處にだつて澤山ある。(運搬車に腰を懸く。)己はもつと怖しい秘密を知つてゐる。

他の一人の坑夫。やつぱりこの山のことなのか。

十蔵。(首を振る。)いや。この山のことなんぞぢやない。己のは女のことなのだ。(命令する如く。)さあ暗くなつたから皆灯を點ける。さうして己の怖しい秘密と云ふのを聽いて呉れ。

(坑夫等はすべて携へたるカンテラに灯を點す。舞臺赤味を帯びたる明るさとなる。)

十蔵。(空想的に。)二三年前、己がまだ船に乗つてゐた時分のことなのだ。己はその時分は若い上手な舵取と云はれて、どんなに方々の港の女を騒

がしたらう。海に住んでゐる人の習慣で、船が錨を下してゐる間と云ふものは、まるで酒と女とを離さないのだ。さうして唯そればかりを樂みにして港から港への海の旅を續けて往く。(間。)その時もやつぱり七日ばかりの航海をして此處よりもつと北の方の或る港へ入つて來たのだつた。(突然。)お前たちは海を見たことがあるか。あの大きな青い海を。

(坑夫等口々に答ふれども多く海を見たる者なし。)

坑夫等の聲

○己はまだ見たことがない。

○子供の時分にたつた一度見たことがある。

○何處まで往つても果がないと云ふことだ。

○風が吹くと浪が立つ。風が吹かぬと浪がない。

○暴風の時は怖いさうだな。

○青く光つてゐるのは綺麗だらう。

○己のおやぢは鯨船に乗つてゐた。

○己の兄貴は潜水夫だつた。

（若き坑夫は微笑を以て、これ等の言葉に酬ゆ。暫時沈黙。）

十蔵。まわ皆の思ふ通りに考へてゐるが好い。己は海の秘密を話さうとしてゐるのではないのだから。（問。）それから己は船がその港に入つてゐる間、何時ものやうに酒と女とで毎日暮らしてゐたのだ。さうしてこの港を出ると云ふ終ひの日に、己は今話さうとしてゐる怖い秘密を

知るやうになつたのだ。

一人の坑夫。早くその秘密が聴きたいな。

十蔵。今直ぐ話すよ。それより前に己にもう少しその港のことを話さして呉れ。（更に空想的に。）丁度その時は冬の始めだつたから、毎日々々霽まじりの雪が降つて、港街には暗い寂しい日ばかり續いてゐた。さうして薄く張り詰めた氷の上には微かに灰色の雪が積んで、夜になると入口に立つてゐる燈臺の灯の青く瞬くのが、如何にも悲しく見えるのだつた。己はよくその怖い秘密を持つた女の家の上階の欄干に寄り懸つて、この哀れな港の景色を眺めた。さうするとかう云ふ時には、きつと一群の鷗が港の中を飛び迷つてゐる。（突然。）お前たちは鷗を見たこ

とがあるか。あの灰色の羽の鳥を。

（坑夫等は口々に答ふれども多く鷗を見たる者なし。）

坑夫等の聲

○己はまだ見たことがない。

○子供の時分にたつた一度見たことがある。

○何でも嘴まで灰色だと云ふことだ。

○飛ぶ時は羽の音が遠くまで聽える。

○暴風と一所に海を渡るのださうだな。

○夜その啼き聲を聽いたら悲しいだらう。

○己のおやぢはその鳥を殺した。

○己の兄貴はその羽を持つてゐた。

（若き坑夫は前と同じく微笑を以て、これ等の言葉に酬ゆ。暫時沈黙。）

十蔵。まあ不思議な鳥と思つてゐればそれで好い。己はその鳥の秘密を話さうとしてゐるのではないのだから。（問。）己が怖しい秘密を知つたのはその港街にゐる女からだつたのだ。

一人の坑夫。どんな女だつたのだい。

十蔵。どんな女だつて好いちやないか。唯兩方の腕に錨の刺青がしてあつたと云へば、それで大抵分るだらう。己はその女に會つてから、何だか女と云ふものが非常に不思議に思はれて來たのだ。その眼を見ても不思議に思はれた。その唇を見ても不思議に思はれた。その胸を見て

も不思議に思はれた。何だか今まで自分の知らなかつた或ものが、眼の前に現はれたやうに思はれて、どんなにその女のことを考へたらう。その心持は一日一日烈しくなつて来て、己はこの女と一所にゐるのが苦しくつて堪らないやうになつたのだ。或時は杯を投げ付けやうとしたこともあつた。或時は欄干から突き墜さうとしたこともあつた。併し己がこんなことをする度毎に、女は何時も冷やかに笑つて己の顔を眺めてゐるばかりだつた。

一人の坑夫。さうして怖しい秘密と云ふのは。

十蔵。今直ぐ話すよ。(同。)そのうちに己は如何かして女から遁げやうとしたのだ。併しいくら外の女の所へ往かうとしても、如何してもその女

の所へ来るやうになるのだ。己はもう苦しくつて堪らなくなつた。この儘からしてゐると氣が狂ふやうに思はれた。咽喉が塞がつてしまふやうに思はれた。胸が裂けてしまふやうに思はれた。そこで己は如何してこんな心持になるのかと云ふことを考へたのだ。(稍強く。)さうして己はあの女の胸の中に怖しい秘密があると云ふことに氣が付いたのだ。

一人の坑夫。ふうん。その女の胸の中に。

十蔵。(感激の調子。)あの女の胸の中に怖しい秘密がある。かう氣が付いたから、己は如何かしてそれを知りたいと思つたのだ。それからと云ふものは己はそのことばかり考へてゐたな。殆んど夜も眠らずに、如何し

たらそれを知ることが出来るだらうと云ふ事ばかり考へてゐたのだ。さうして船がその港を出ると云ふ曉に、己はやつとその怖しい秘密を知ることが出来たのだ。

五六人の坑夫。(同時に。)如何して。如何して。

十蔵。その曉のことは己も自分でよく分らない程夢中だつた。氣が付いて見ると、己は片手に大きなナイフを握つて、片手に血みどれの心臓を握んで、ぼんやり海を見ながら立つてゐた。さうして直ぐ傍には胸を切り裂かれたその女の死骸が横はつてゐた。

一人の坑夫。怖しい秘密と云ふのは何だつたのだ。

十蔵。怖しい秘密と云ふのはその心臓だつたのだ。己はその時驚いて遣つ

て来た船長の眼の前にその心臓を突き付けて、怖しい秘密が分つたかと叫んだのだつた。

五六人の坑夫。(同時に。)それから。それから。

十蔵。それから己はこの山へ遣つて来たのだ。(間。)併し己はこの女の心臓を忘れることが出来ないと同時に、何時までもあの海を忘れることが出来ない。坑の奥で仕事をしてゐる時でも、時々遠くの方で浪の音が聽えることがある。そんな時には己は海へ往きたくつて堪らなくなるのだ。(命令する如く。)皆海へ往つて見ろ。さうして潮風に吹かれて見ろ。もうこんな山にゐる氣は出やあしないせ。

(坑夫等はすべて海に對する憧憬の情を示す。)

坑夫等の聲

- 海へ往かうか。
- 海へ往かうか。
- さうして船乗にならう。
- 眞つ青な水がある。
- 眞つ白な雲がある。
- 眞つ黒な岩がある。
- 併し、暴風の時は如何しよう。
- さうだ。暴風の時は如何しよう。

（若き坑夫は微笑しつつ群集を眺む。）

十藏。（獨語。低くけれど強く。）皆にやつと己の云ふことが分つたらしいな。

（この時左方より次郎の娘おせつ出づ。廿二三歳位。粗末なる衣服。藁草履。容貌は普通なれども、眼は極めて夢幻的なり。慌ただしく走り來りて坑夫等の一人に衝き當る。）

おせつ。（立留る。）おや、ご免なさいよ。何しろ大急ぎで駆けて來たもんですからね。

一人の坑夫。如何したのだ。おせつさん。

他の一人の坑夫。何か大變なことでも出來たのかい。

おせつ。（群集を認めて逡巡す。）いえね、今日の夕方からお父さんが何處かへ往つてしまつたんですよ。如何もこの四五日變なことばかり云つてたもんですから、如何かしやしないかと思つて心配でなりません。（間。）此

處へは來ませんでしたか。

一人の坑夫。さつき遣つて來たよ。

他の一人の坑夫。(右方を指差す。)さうしてあつちの方へ往つたよ。

おせつ。(右方を見る。)まわ、あつちへ往つたんですか。何處へ往くつもりな
んでせう。(間。)何處へ往くとも云つてゐませんでしたか。

一人の坑夫。そんなことは云つてゐなかつたな。

他の一人の坑夫。手も足も血だらけになつて歩いて往つたよ。

おせつ。(不安の眼差。)まわ、如何したんでせう。

(坑夫等すべて此女の周圍に集る。唯若き坑夫のみ腰懸けたる儘注意深き眼を女の上に注ぐ。)
一人の坑夫。まだそんなに遠くは往かないだらう。急いで往けば追着くせ。

他の一人の坑夫。さうだ。お前が往つて連れて歸れば好い。

おせつ。さうですねえ。それぢやあ急いで往つて見ませうか。あつちへ往
つたんですね。(右手に走り去らむとす。)

十蔵。(立上る。)おい。一寸お待ち。往つたつてとても歸りやあしまいよ。
打つ棄つて置いた方が好いせ。

おせつ。(躊躇。)それでもこの儘にして置くと大變なことになりやあしない
でせうか。

十蔵。大丈夫だよ。

おせつ。如何も私にはお父さんの生命に關はるやうなことがあるやうに思
はれてなりません。(右方を指差す。)まわあつちの方をぞ覽なさいな。何

時もの夜とは違つて氣味の悪い程眞つ暗ですわ。

十藏。さうか。(間。)それならこの灯を持つて往つたら好いだらう。

(十藏は手に提げたるカンテラの灯を女に渡す。女はこの灯を携へて右手に走り去る。坑夫等はその還音の怪しき反響に耳を傾けつつ、この暗黒なる「夜」の中より、大いなる運命の影を發見せむとするものの如く、すべて右方に向つて力ある凝視を續けつつあり。若き坑夫は二度運搬車に腰を懸けて偶像の如く動かす。暫時沈黙。やがて眠より覺めたる人の如く、坑夫等の間より靜なる呟きの聲聽え來る。)

坑夫等の聲

○何と云ふ眞つ暗な夜だらう。

○何と云ふ眞つ暗な夜だらう。

○眼が痛くなるやうだな。

○此處に立つてゐるのも怖しい。

○もうあの女の灯は見えなくなつた。

○まるで魂のやうに消えてしまつた。

○さうしてその後には前よりも眞つ暗だ。

○呼吸が詰まる程眞つ暗だ。

○何か怖しいことがあるのかな。

○何か怖しいことがあるのかな。

(或者は手を動かかし、或者は眼を見張り、或者は口笛を吹き、或者は足を踏み鳴らし、強ひてその心より不安を振り落さむとす。)

十藏。(立上りて群集の中に入る。)おい、皆もう一度己の云ふ事を聽いて呉れ。

五六人の坑夫。(同時に。)何だ。何だ。

十蔵。外のことぢやない。己は急に海へ往きたくなつたのだ。あの大きな海の上を、眞つ白な帆を張つた船に乗つて走りたくなつたのだ。(間)己はもうこの山にあるのが厭になつたのだ。生きながら石になつてしまふやうなこの山にあるのが厭になつたのだ。まあこの夜の眞つ暗な中を凝つと眺めて見る。この儘死んでしまふのぢやないかと思はれる程怖しいぢやないか。

五六人の坑夫。(同時に。)さうだ。何とも云へぬ程怖しう。

十蔵。如何だ。これから皆一所に海へ往かう。(叫ぶ)海へ往かうと思ふ者は灯を振つて呉れ。

(坑夫等の多数は手に持ちたる灯を高く振る。黒き油煙が凄じく漲れる中に、興奮せる群集は何ごとかが口々に叫び始む。)

坑夫等の聲

○怖しい夜だ。

○怖しい夜だ。

○己たちの待つてゐた時は。

○いよいよ今夜となつたのだ。

○この眠つてゐる山から。

○あの眼覺めた海へ。

○海へ往かう。

〔戯曲〕夜

三

○海へ往かう。

〔若き坑夫は傍なる坑夫の灯を奪ひて二三歩進む。〕

十蔵。(叫ぶ。)海へ。海へ。

坑夫等の聲

○海へ。海へ。

○海へ。海へ。

○海へ。海へ。

〔坑夫等の群集は徐かに左方に向ひて動き始む。騒擾次第に烈しくなる時幕落つ。〕

第二幕

その鑛山の事務所と試験室とを兼ねたる家屋の内部。山腹の傾斜面に建てられたる粗末なる木造の西洋館なり。正面は山と反對の側にありて、極めて大いなる二個の窓あり。その玻璃の近くまで窺ひ寄れる暗黒なる「夜」は、恐怖と鬱憂とに満ちたる眼を、絶えず室内の光景に注げり。この二個の窓の間に兩開きの扉あり。この扉を出づれば、直に鐵造の梯子を傳はりて山腹に通ず。左方に正面と同じ大きさの窓一個。その窓の前に大いなる方形の卓子ありて、鑛石の試験を行ふ所に使用す。窓の傍の壁に

〔戯曲〕夜

三

添ひて薬品を格納せる一個の棚あり。その棚の上には、計量器、碎末器、濾過器の類を置く。卓子の上には二三の薬品の罐、分析用の器械、種々の試験管等、鑽石とともに散在せり。

右方に常に出入口として使用せらるる扉あり。扉の傍の壁に添ひて書類を入れたる棚あり。室の隅に小形の金庫を置く。

その金庫と正面の窓との前に長方形の事務用の机あり。傳票、帳簿、紙片の類その上に堆積す。中央より稍右方に寄りて青き布にて蔽はれたる圓形の卓子。その傍に暖爐。その周圍に椅子四五脚。

三個の電燈あり。一個は事務用の机の上に。一個は室の中央に。一個は試験用卓子の上に。

第一幕より四五十分を經過す。

（鑛山技師原田友彦、試験管を電燈の前に鑿しつつ左方の卓子の前に立つ。三十歳位。極めて普通の容貌。近眼鏡。地の厚き霜降の背廣。同じ色の胴衣。試験管を卓子の上に置き、手を洗ひたる後タオルにて拭ひつつ、窓際に歩み寄りて外を覗く。遙かにダイナマイトにて岩を碎く響きしむ。）

友彦。いやに眞つ暗な夜だな。星ひとつ見えやしない。（間。）それにあのダイナマイトの響が今夜は餘つ程近く聽える。あんな近くに今堀つてゐる坑はない筈だがなあ。

（この時右方の扉を軽く敲く音聽ゆ。）

友彦。（音を聽かず。）如何も近頃坑夫等の中に何かあるやうな氣がするな。何か怖しいことでも企らむのであるのぢやないかと思はれて、時々一人で

身願ひすることがある。(間。)それにこんな夜はよくそんなことが起るものだが。

(前よりも強く右方の扉を敲く音聽。(ゆ。))

友彦。(扉の方を見る。)おや、誰か敲いてゐるやうだな。(扉の方へ歩む。)

(更に烈しく扉を敲く音。)

扉の外の聲。おい、己だ。一寸開けて呉れ。

友彦。(思ひ出したる如く。)さうだ。さつき鍵を懸けてしまつたつけ。(衣兜より鍵を取り出して扉を開く。)

(鑛山の持主澁川勝彌入り来る。六十四五歳位。肥大せる體格。緒き顔。金縁の眼鏡。牛白の髭。茶色の背廣の上に黒き毛の長外套を着る。中折帽子。太き杖。)

勝彌。(微笑。)大層嚴重な戸締まりだね。

友彦。(意外なる顔付。)ああ、あなたでしたか。(間。)如何して今頃お出でになつたんです。

勝彌。不意に思ひ立つて遣つて來たのだよ。(扉の方を振り返る。)おい、静緒。

お前もこつちへ這入つてるが好い。(外套と帽子を脱ぐ。)

友彦。おや、お嬢さんもご一所なんですか。(扉の方へ歩む。)

(勝彌の娘静緒入り来る。二十歳位。美しき容貌。肺を病める人の如く青白き顔色。束髪。コオト。空氣草履。)

静緒。(友彦に。)如何も暫く。お變りもございませんか。

友彦。はあ、相變らずです。併しよくまわこんな山の中にいらつしやいましたね。(椅子を薦む。)さあ、何卒。

〔戯曲〕 夜

〔三人とも椅子に腰を懸く。〕

勝彌。如何してこんなに早くから鍵を懸けて置くのだい。

友彦。〔辯解の調子。〕何しろ不用心ですからな。私がたつた一人だもんですから。

勝彌。〔懐疑的に。〕ふん。何かね。近頃は何か物騒なことでもあるのかね。

友彦。いいえ。さうぢやあないのですけれど、何しろこんな夜ですからな。

勝彌。〔反問。〕こんな夜つて云ふと。

友彦。こんなに眞つ暗な夜ですからなわ。まあ窓から外をぞ覽なさい。怖しい程眞つ暗です。

勝彌。夜は大抵眞つ暗に極まつてらあね。夜が明るくつて堪るものか。

〔友彦は不快の表情を示して沈黙す。ダイナマイトの響聴。〕

静緒。〔驚愕。〕おや、今のは何なんでせう。

友彦。あれはダイナマイトで岩を打ち壊してゐるのですよ。

勝彌。〔注意深き眼差。〕おい、君。あれは何處の坑でやつてゐるのだい。

友彦。如何も私もさつきから變に思つてゐるのですが。

勝彌。變に思つたばかりで、別に調べもしなかつたのかね。

友彦。ええ。多分山に反響してあんな所に聽えるのだらうと思ひましたから。

勝彌。そんなことでは困るぢやないか。早速だが一寸見に往つて來て貰は

う。

友彦。これからですか。

勝彌。無論だよ。ここは己がゐるから大丈夫だ。

静緒。こんなに真つ暗なんでも、明日になすつたら好いでせう。

勝彌。いや、今夜でなけりやあ何にもならないよ。

友彦。よろしい。往つて來ませう。

〔友彦は壁に懸けたる帽子を被り外套を着る。角燈に灯を點じて右方の扉より去る。ダイナマイトの響。〕

勝彌。(傾聴す。) 如何も變だな。(娘に。) お前には遠く聽えるか近く聽えるか。

静緒。そんなに遠くは聽えません。(頼無げに外を見る。) お父さん。うちの別

莊まではまだ餘つ程あるのですか。

勝彌。もう直きだよ。此處から十四五町位しかないからな。

静緒。私は何だか家に歸りたくなりましたわ。(間。) 外はあんなに真つ暗なんですもの。

勝彌。そんなに心細がらないでも好いぢやないか。それに今日山へ往かうと云ふのは、お前が云ひ出したのだせ。

静緒。ええ。あの時は山へ往つて見たかつたのですよ。あの時はまだ晝間だつたんですもの。さうして遠くから見たら、それはそれは綺麗に見えたんですもの。

勝彌。夜にはなるし山は汚ないし、それで家へ歸りたくなつたと云ふのか

静緒。ええ。

勝彌。そりやあお前はまだあの別荘へ往つて見ないからだよ。これから別荘へ往つて、明日の朝眼を覺ましてぞ覽。お前はきつともう歸るのが厭になつてしまふから。直ぐ前に大きな湖があるんだせ。

静緒。(産撃する如く。)その湖ですね。お母さんが身を投げたつて云ふのは。

勝彌。何だと。(椅子より立ち上る。)誰がそんなことを云つたのだ。

(沈黙せるまま二人は苦しき凝視を續く。)

静緒。(冷かに。)誰からも聴きはしません。唯私が自分で、さうぢやないか知らと思つただけですわ。

勝彌。(不安の心持。)さうか。併しそんなことを無暗に口に出して云ふものぢやないぞ。(椅子に腰を懸く。)お前のお母さんは、お前がこの間まで這入つてゐた病院で歿くなつたのだ。湖に身を投げて死んだなんて、そんな馬鹿なことはないのだ。お前はよく覺えてゐまいが、お前のお母さんは何だか秘密を持つてゐるやうな女だつた。それだから何時も鬱ぎ込んでゐて、何か考へてばかりゐた。到頭終ひには氣が狂つて三年の間あの病院に這入つてゐたのだ。さうして秘密ばかりを残して死んでしまつたのだ。

静緒。さうですか。(間。)その秘密つて何でせうね。つまりお母さんはその秘密の爲めに病氣におなりになつたのですね。

勝彌。まあそんなものさ。(静緒の顔を見る。)併しお前は近頃大變お母さんに似て來たせ。

静緒。(悲しげに笑ふ。)それぢやあ今に氣が狂ふかも知れませんね。

勝彌。馬鹿あ云ふな。己が似て來たと云つたのは、そんなことを云つたのぢやない。お前の顔がお母さんにだんだん似て來たと云つたのだ。

静緒。それは親子ですもの、不思議はないぢやありませんか。

勝彌。(捜るが如き眼差。)親子だからお前が死んだお母さんに似て來ても、不思議はないと云ふのだね。

静緒。ええ。さうぢやありませんか。

勝彌。(嘲笑の如き表情。)ふん。さうか。(間。)別段不思議はないやうだね。

(ダイナマイトの響遠く聴ゆ。)

静緒。おや、今度はかなり遠方のやうに聴えますね。

勝彌。うん。あすこに聴えるのなら別段心配することもないのだが。(間。)併し如何も變だよ。

(この時正面の兩開きの扉を外より烈しく敲く者あり。)

扉の外の聲。(喘ぎつつ叫ぶ。)……開ける……開ける……開けないとこの扉を叩き壊すぞ……

(二人は眼を見合せて暫時不安なる沈黙を守る。更に烈しく扉を敲く音とともに、氣味悪き呻吟の聲聴え來る。)

扉の外の聲。(叫ぶ。)……開ける……開ける……(狂ふが如く。)開けないな……

よしそれぢやあ……この扉を叩き壊すぞ……

(扉の面を掻き捲るが如き氣勢。やがて扉を押し破りて闖入せむとす。勝彌は立上りて内部より扉を支ふ。)

扉の外の聲。(呻吟。)己は如何しても取返す……己は如何しても取返す……

(扉の押し破らるると同時に、第一幕に現はれたる老坑夫入り来る。倒れむとして繰うじて椅子に凭りて立つ。勝彌と顔を見合はす。極めて怖しき一瞬間。)

勝彌。(驚愕。)お前は次郎だな。

(長き間。老坑夫は苦しげに呻吟す。)

次郎。(片手に握りたる圖面を示す。)これを見る。

勝彌。何だ。それは。

次郎。(悲しげに。)よくそれを見る。まさか忘れてしまひはしなからう。(卓

上に圖面を開く。)

勝彌。(思ひ當りたる表情。)お前はまたこんなものを持つてゐるのか。さうしてこれを如何しろと云ふのだ。

次郎。己はこの山を取り返しに來たのだ。

勝彌。何を云つてゐるのだ。呆けたことを云ふものぢやないせ。

次郎。(吃りつつ。)呆けたことだと。何が呆けたことなのだ。よく聽け。こ

の山はほんとは己の山なのだ。それを貴様が盗んだのだ。それだから今夜己はこの山を取り返しに來たのだ。

勝彌。ふん。それぢやあこの山はお前の山だと云ふのだな。それを己が盗

んだと云ふのだな。それだから今夜お前はこの山を取り返しに来たと云ふのだな。

次郎。(厳かに頷く。)さうだ。己はこの山を取り返しに来たのだ。

勝彌。よし。それぢやあ己の云ふことをよく聽け。(間。)この山は己の山なのだ。さうして己はお前の山などを盗みはしないのだ。併し取り返すと云ふなら取り返して見ろ。

次郎。うん。己は如何しても取り返す。

勝彌。(卓上の鬮面を破り棄つ。)こんなものが何になるものか。

次郎。(飛び蒐りて鬮面を奪はむとす。)何をするのだ。何故己のものを破るのだ。

(床の上に落ち散りたる紙片を拾ひ集む。)己が四十年の間大切にしまつて置い

たものを、こんなに破いてしまつたな。(紙片を仕事着の衣兜に收む。)如何してこれをなくして堪るものか。これがたつた一つの證據なのだ。これがあるばかりに、この山が己のものだと云ふことが分るのだ。いやこればかりぢやない。山に聽いて見ろ。山は己のものだと云ふだらう。金に聽いて見ろ。金は己のものだと云ふだらう。(勝彌の腕を掴む。)

さあ、これから一所に裁判所に往かう。さうしてこの山が、己のものか貴様のものか、決めて貰はう。

勝彌。何をするのだ。馬鹿。(次郎の手を振り離して、荒々しく突き飛ばす。)

(次郎は暖爐に衝き當りて床の上に倒る。静緒に抱き起されたるまま、疲勞と興奮との爲めに立つべき力もなく、苦しげに呻吟しつつ床の上に坐す。)

静緒。お父さん。危ないぢやありませんか。もし打ち所でも悪かつたら如何なさるんです。

勝彌。打ち所が悪かつたら死ぬばかりさ。(間)そんな奴はその儘にして置けば好い。そんなことをすると着物が汚れるよ。(老坑夫に)おい、馬鹿な真似をするもんぢやないせ。さあ、早く歸れ。これからこんなことを己の所へ云つて來ると、お前の身體は如何なるか分らないぞ。

次郎。なあに歸るものか。己は如何してもこの山を取り返すのだ。(呻吟す)四十年前に己がこの山を見付けて一人で坑を掘つてゐた時のことを、貴様はよもや忘れやしまい。あの時貴様は何だつた。哀れな旅商人だつたぢやないか。

勝彌。さうさ。己は昔は旅商人だつた。それが如何したと云ふのだ。

次郎。それが己の山を盗んだので、急に大金持になつたのだ。(戦慄しつつ)さうして貴様はあの時のことを覚えてゐるか。

勝彌。あの時のことと云ふと。

次郎。怖しい山海嘯のあつた時のことだ。己は貴様とたつた二人で始めて己が掘つた坑の前に立つてゐたな。

勝彌。(微かに肩を顫はす)うん。

次郎。暴風が幾日も續いた時だつた。二人は外套を通して身體まで濡らす雨に震へながら、山を見廻つて歩いてゐたのだつた。あの坑の前に立つた時、貴様は己に坑の中を見廻つて來て呉れと云つたな。

勝彌。あの時分のこととはもう忘れてしまつたよ。

次郎。忘れてしまつたのか。(痛ましく笑ふ。)それでは山を盗んだことを、忘れてしまつたのも無理ではない。(間。)忘れたのならまた思ひ出すやうに、その時のことを話して遣らう。それから己は何の氣なしに坑の中へ這入つて往つたのだ。不圖坑の中へ這入つた時、己は何だか自分の墓の中へ這入て往くやうな心持がした。水の雫が涙のやうに悲しげに岩を傳はつて落ちてゐる。何處からともなく冷たい風が吹いて來て手に提げたカンテラの灯も危なく消えさうになる。火に驚いて飛び出して來る蝙蝠が顔に吸ひ着かうとするので、口を塞がれて呼吸が出來なくなつては大變だと思ひながら、逐つ拂ひ逐つ拂ひ歩いて往く。(感激を

強ふるが如く。)己は子供の時分から坑の中で育つたのだが、この時程たつた一人で坑の中にあると云ふことを、心細く思つたことはない。己は思はずたつた一人だと小さな聲で呟いたのだ。さうしてそれがまるで誰か直ぐ傍で叫んだやうに、自分の耳に聽えたのに驚いたのだ。渦を卷いたやうにその響が坑の遠くの方へだんだん消えて往くのを聽いた時、己の眼の底から熱い涙が湧き上つて來た。さうして己は長い間地面に喰ひ付くやうにして泣いてゐた。

(静緒は熱心に次郎の話を傾聴す。勝彌は二度微かに肩を顫はす。)

次郎。己がすつかり坑の中を見廻つて出口の所に歸つて來た時、貴様は其處がどんなになつてゐたか知つてゐるか。(呻吟。やがて烈しき怒を感ずるもの

の如く叫ぶ。)人殺し。(立ち上らむとして倒る。) 貴様はその時、己を生き埋めにしたのだな。

勝彌。(椅子より起つ。) 何だと。

次郎。貴様は己を殺さうとしたのだ。坑の口は何時の間にか土で塞いであったのだ。あれが横坑だつたから助かつたのだが、縦坑だつたら如何だらう。己は上から落ちて来る土の下になつて、死んでしまつたのに違ひないのだ。併しあの時も己はもう命がないと思つた。さうして死んだら如何なるだらうと考へながら、ぼんやり坑の中に立つてゐた。

静緒。まあ、どんな心持だつたでせうねえ。

次郎。(唇を噛む。) さうしてこんなことをしてゐては駄目だと思つて、己は

一所懸命に土を掘り始めたのだ。何時の間にかカンテラの灯も消えてしまつて、坑の中は眞つ暗だ。その中でこの両手で滅茶苦茶に土を掻き除けたのだ。幾時間経つたか分らない。幾日過ぎたか分らない。やつと坑の口から這出すことが出来た時には、己の両手の指の爪はすっかり脱れてゐた。(呻吟。)それから己が山の街へ往つた時、道で出會つた一人の坑夫は、よく己を知つてゐる奴だつたが、己の顔を見てもまるで知らないやうに往つてしまつたのだ。分らないのも無理はない。後で鏡に向つた時、己は自分でも顔が變つたのに驚いた程だつた。何時の間にか二十も三十も一時に年を取つたやうに、頭は白髪許りになつてゐる上に、顔はまるで獸のやうになつてゐたのだ。(勝彌に。) 己が

この山にゐると云ふことは、今まで貴様も知らなかつたらう。貴様ばかりぢやない。この山にゐるものは今まで一人も知らなかつたのだらう。(問。)四十年の間己はまるで死んだもののやうになつて暮らして来たのだ。貴様の下に使はれて毎日坑の中で働いてゐたのだ。少しでも澤山金を掘り出すのを、せめてもの楽しみにして、苦しい生命を續けて来たのだ。昔のことを思ひ出して石に縋つて泣いたことも幾度かあつたのだ。

勝彌。何故四十年の間黙つてゐたのだ。何故己の所へ遣つて來なかつたのだ。

次郎。(抛つ如き調子。)そんなことをしても無駄だと思つたからよ。また己を

生き埋めにするかも知れないと思つたからよ。

勝彌。ふん。それぢやあお前は自分で自分を死んだもののやうにしたのだね。

次郎。(強く。)さうだ。自分で自分を殺したのだ。貴様のやうな奴に殺されるより餘つ程好いからなあ。(痛ましく笑ふ。)併し今日から己は生き返つたのだ。それだから己は如何してもこの山を取り返すのだ。

(この時山腹を過ぐる坑夫等の一群ありて、悲しげに歌ふ聲聴ゆ。)

坑夫等の歌

坑夫する身と、

空飛ぶ鳥は、

〔戯曲〕 夜

何處のいづこで、
果てるやら。

〔夜の空氣は微かなる波動を窓の玻璃まで傳へ来る〕

次郎。(喜ばしげに。) おお。あの歌を歌つてゐる。あの歌を歌つてゐる。
静緒。まあ、あの歌は如何云ふ歌なんぞせう。

次郎。あれは私の若い時分に流行つた歌なんだ。
静緒。まあ、さうなの。私はこの間あの歌を聴いて、なんて悲しい歌だらうと思つてゐたんですよ。

次郎。(頷く。) さうだらう。さうだらう。あの歌を聴けば、誰でも悲しくなるに違ひない。

〔二度前よりは少し遠く、更に悲しげに坑夫等の歌ふ聲聴ゆ。〕

坑夫等の歌

胸に情の

焰が燃えりや、

地にも黄金の

花が咲く。

〔坑夫は回想の眼差を窓の外に注ぐ。〕

次郎。ああ、あの歌の流行つた時分を思ふと、まるで夢のやうだなあ。あの時分は己もまだ年が若かつたから、一日一日何も考へずに暮らしてゐたのだ。(猶歌に聴き入るが如くなりしが、突然何ごとをか思ひ起して戦慄す。) おい

貴様は己からもう一つ盗んだものがあるな。

勝彌。何を盗んだのだ。

次郎。己の女を盗んだのだ。さうして貴様はその女までも殺さうとしたのだ。

勝彌。何を云ふのだ。馬鹿々々しい。先きから黙つて聽いてゐると、何だか譯の分らないことばかり云つてゐるぢやないか。お前は氣が狂つてゐるのだな。

次郎。うん。氣が狂つてゐるかも知れない。併し、己の云ふことは皆本當なのだ。

勝彌。(冷やかに。) さうさね。自分の云ふことを皆本當だと思つてゐる所な

どは、確かに氣が狂つてゐる。

次郎。(少しく怒る。) 氣狂ひでも好い。そのかはり氣狂ひだから何を云ふか分らないぞ。

勝彌。何でも云へ。そのうち病院へ入れてやるよ。

次郎。(強く。) 病院。(恐怖の表情。) あの女も三年の間病院に這入つてゐたさうだな。さうして到頭病院を抜け出して、湖に身を投げて死んだのださうだな。

勝彌。(娘の態度を注視しつつ。) それは誰のことを云つてゐるのだ。

次郎。貴様の家と己の家とに、娘を一人づゝ残して死んだ女のことだ。(静緒を凝視す。やや長き間。) おお、この娘だな。あの女によをく似てゐる。

勝彌。(急に歩み寄りて次郎の肩を掴む。) さあ出て往け。早く出て往かないと叩き殺すぞ。

次郎。(坐せるまま勝彌を見上ぐ。) 如何して如何して、中々出て往くものか。(呻吟。) 如何しても己は山を取り返す。如何しても己は山を取り返す。

勝彌。(烈しく。) 出て往かないな。よし。(腕を握りて次郎の體を二三尺引き摺る。)

(娘は走り寄りて、勝彌の手を次郎の身より離さむとす。)

静緒。お父さん。何卒お願いですから、手荒なことは止して下さい。

(勝彌は手を離して、二三歩却きて次郎を見る。次郎は床の上に横はれるまま呻吟す。)

次郎。(叫ぶ。) 如何して出て往くものか。(喘ぎつつ。) 如何しても己は山を取り返す。

(右手の扉口より友彦入り来る。續いて次郎の娘おせつ入り来る。二人は大いなる悲哀を暗示するが如きこの光景に對して、驚愕と恐怖とを感ず。)

おせつ。(次郎の傍へ走り寄る。) まあ、お父さん。如何なすつたんです。

次郎。(おせつを見る。) 何しに來たんだ。ここはお前の來る所ぢやないのだ。

おせつ。それでも私はどんなに搜したか知れやしません。幾度谷へ墜ち懸けたか知れませんでした。

友彦。今も本當に危い所だつたね。僕が通り懸らなかつたら、きつとあの谷へ墜ちてしまつたよ。

勝彌。(友彦に。) おい、そんなことは如何でも好いぢやないか。それよりさつきのマイナマイトの一件は如何したのだ。

友彦。あれはやつぱり今まで掘つてゐる坑でした。今夜は空が曇つてゐるので、あんなに近く聴えたのだらうと思ひます。

勝彌。さうか。(おせつを指差す。)君はその女を知つてゐるのかい。
友彦。ええ。知つてゐます。この次郎の娘です。

勝彌。そんな者を無暗に事務所の中へ引つ張り込んで困るぢやないか。何だね。君は何時もそんな女をここへ引つ張り込むのだね。それであんなに早くから、扉に鍵を懸けて置くのだね。

友彦。馬鹿なことを云つちやいけません。僕はそんなことを一度もしたことはありませんよ。

勝彌。それぢや何故あんなに早くからその扉に鍵を懸けて置いたのだ。

友彦。そのことですか。(間。)よろしい。さうお聴きになるなら申上げませう。實は近頃坑夫達が何かやり出しさうなんです。二月程前から坑夫達の間、妙な迷信が廣まつて往つたのです。さうしてだんだん仕事を惰けるやうになつたのです。毎日々々酒を飲んで博奕ばかり打つてゐるのです。この二三日と云ふものは、働いてゐる者は極く少ないのです。皆あつちに一塊りこつちに一塊りと云ふ風に、方々に集つて何か話し合つてゐる様子なのです。

勝彌。(眉を寄す。)その迷信と云ふのは、どんなことなのだね。

友彦。つまらないことなんです。唯海へ往くと云ふことなのです。

勝彌。海へ往く。(訝かしげに。)何しに海へ往くと云ふのだらう。

友彦。さあ、それはよく分りませんが、如何も何しに往くと極まつたこともないやうです。坑夫の中に一人若い男で船乗上りの奴がゐるのですが、そいつが何か云ひ觸したのらしいのですな。

勝彌。そんな奴は早く逐つ拂つてしまへば好いぢやないか。

友彦。併し、そいつを逐つ拂ふと、皆そいつに附いて往つてしまふと云ふことがよく分つてゐるのです。さうしてその時はどんなことをするか分りやしません。あなただつて決して安心は出来ませんせ。

次郎。(突然叫ぶ。) さうだ。貴様はあいつ等に殺されるぞ。

勝彌。(冷笑。) あいつ等に殺されて堪るものか。

(二人の娘は次郎の傍に寄りて、手に附きたる血などを拭ふ。友彦は不愉快なる顔付にて、

事務用机に凭りて何か書き始む。勝彌は窓の外を凝視しつつ深き沈黙に落つ。左方の窓に近く鼻の聲聴ゆ。)

静緒。まあ、如何してこんなに怪我をしたのでせう。

おせつ。きつと岩でも崖でも關はずに駆け上がったのですよ。お父さん。

痛みはしませんか。

次郎。(首を振る。) ううん。痛くも何ともない。

静緒。(おせつに。) お前の家はやつぱりこの山にあるの。

おせつ。ええ。

静緒。ずうつとこの山で育つたのかい。

おせつ。ええ。私はこの山より外に何處も知らないのですよ。そのかはり

この山なら知らない所つてありません。

静緒。さうかい。私は今夜始めてこの山へやつて来たの。何處か面白い所があつたら教へてお呉れな。

おせつ。ええ。ようございますとも。今度湖の方へ往つて見ませう。

静緒。私はこれから湖の傍の家へ往くんだよ。

おせつ。まあ、これからですつて。

静緒。何故。(間。)そんなに湖までは遠いの。

おせつ。いいえ。そんなに遠くはないのですけれど。(間。)それでも外は眞つ暗でございますよ。それに路がずるぶん酷いのですからね。

静緒。そんなに路が酷いの。

おせつ。ええ。夜などはまるで歩けやしません。

次郎。(呻吟す。)なあに己のやうにして往けば何でもない。

おせつ。女にはとてもそんなことは出来ませんわ。(間。父に呟く。)お父さん、歸りませうよ。

次郎。(低く強く。)いや、己は中々歸らないよ。歸りたければ、お前先に歸るが好い。

静緒。(おせつに。)これから歸るなんて大變だよ。それにあんなに苦しさをなんだもの。静かに休まして上げた方が好いよ。

おせつ。それでもここにあると、どんなことになるか分りませんもの。静緒。大丈夫だよ。それに家までは餘つ程あるのだらう。

おせつ。ええ。かなりありますわ。

静緒。あの體で如何してその路が歩けるものぢやないよ。

おせつ。さうですねえ。如何したら好いでせう。

次郎。(二度。)なわに己のやうにして往けば何でもない(呻吟す。)

(二人の女は顔を見合はす。沈黙。鼻の聲寂しげに聽ゆ。)

静緒。おや、鼻が啼いてゐるやうだね。

おせつ。あら。あれが鼻なんですか。如何したんでせう。この山には鼻はゐないものになつてゐるんですがねえ。(間。)何だか氣味の悪い啼き聲だこと。

静緒。この近所にはまるで樹が生えてゐないやうだがねえ。何處で啼いて

ゐるのだらう。

おせつ。(左方の窓を指差す。)如何やらその窓の上らしいやうですね。

静緒。何だか寂しいわね。(やや長き間。)そんなに黙つてゐずに、湖のことで

も私に話してお聽かせな。

おせつ。湖のことですか。

静緒。ええ。その湖は大きいの。

おせつ。さうですねえ。かなり大きな湖でございますよ。水は不思議な程眞つ青で、いくら風が吹いても波の立つたことがないのださうです。

何時でしたか暴風の時に、丁度この湖の傍を通りましたが、周圍の木の樹は皆吹き倒されさうになつてゐるのに、湖の水は何時もの通り静

かで、浮いてゐる木の葉さへ動かない位でございました。

静緒。そんな湖を見てゐると、どんな心持になるだらう。

おせつ。人のことは存じませんが、私は何だか悲しくなりました。その静かな水の上をじつと見てゐると、何だか譯分らずに泣きたくなつて、一人で涙が出て来るのでございます。

静緒。私もお前の話を聴いただけで、きつと悲しくなるに違ひないと思つたよ。その湖を見て悲しくなるのは、お前ばかりぢやないのだよ。

おせつ。それから悲しくなるばかりぢやありません。何だか懐かしくなることがございましたわ。

静緒。まあ、その湖が懐かしくなるのかい。

おせつ。いいえ。さうぢやないので。誰とも分らず懐かしくなるのです。

私はその時顔もよく知らないお母さんのことを思ひ出して、急に會ひたくなりました。

静緒。それぢやお前には今お母さんがないの。

おせつ。ええ。お父さんと私とたつた二人きりなんですわ。

静緒。(涙ぐむ。)それぢやお前も寂しいだらうねえ。お母さんは歿くなつたの。

おせつ。いいえ。私が三つの時に、何處かへ往つてしまつたんださうです。まだ生きてゐるのか、もう死んでしまつたのか、私は少しも知りません。(嗚咽。)お父さんに聴いても、何時も厭な顔をしてあんな女のこと

は聴くなと云ふんです。

静緒。さうかい。私もお母さんがゐないのだよ。一年ばかり前にお歿くなりになつたの。

おせつ。まあ、さうでございますか。

静緒。私もやつぱりお父さんと私と二人きりなの。

おせつ。まあ、私とよく似ていらつしやいますねえ。

静緒。さうだねえ。それに私もその湖を見ると、きつと死んだお母さんのことを思ひ出して、お目に懸りたくなるだらうと思ふのだよ。

おせつ。如何してでございます。

静緒。私のお母さんは大變その湖がお好きだつたの。何時も私にその湖の

ことをお話しになつて、お前に見せたいがお父さんがいけないつておつしやるから、見せることが出来ないと、繰り返して云つていらつたのだよ。

おせつ。如何してお父さんは、あなたにその湖を見せてはいけないとおつしやつたのでせう。

静緒。多分私に悲しい思をさせない爲めだらうよ。その湖を見ると、誰でも悲しくなると云ふことを知つていらつて、なるべく私に見せないやうになすつたのだらうよ。それだから私は、その湖の傍に立つてゐる家へも、今までまだ一度も往つたことがなかつたのだよ。おせつ。今日はよくまあお許しが出ましたね。

静緒。まあ、今日は如何云ふ譯だか、直ぐ往つても好いとおつしやつたの。併し家を出るのが遅かつたものだから、もう山を登り懸けた時日が暮れてしまつたのだよ。そこまで車夫を連れて來たのも、如何してだかお父さんが歸してしまつたし、ここに來るまでの山路はたつた二人でそれは心細かつたわ。

おせつ。さうでございませうね。山に慣れてゐる私どもでも、こんなに眞暗な夜は心細い様な氣が致しますもの。

静緒。さうだらうねえ。それに私はこの間まで病氣だつたものだから、もう歩けなくなつてしまつたのだよ。それでは一寸休んで往かうと、お父さんがおつしやるのでここに寄つたのだけれど、路がそんなに酷い

上に、こんな眞つ暗な夜では如何することも出來ないねえ。

おせつ。お困りですわねえ。(間) 御病氣あげくのお體で、夜道をお歩きになつてはいけません。どんな御病氣だつたのでございます。

静緒。私の病氣かい。(間。思ひ出して戰慄す。) それはそれは怖い病氣だつたのだよ。始めは夜眠れないことが時々あつたの。それがだんだん酷くなつて、終ひには七日も續いて眠れないと云ふやうになつてしまつたの。さうしてだんだん熱が烈しくなつて、謔言を云ふやうになつたのだよ。おせつ。まあ、お苦しかつたでせうねえ。

静緒。ああ、まるで夢中だつたね。自分では知らなかつたけれど、謔言では何時も海のことばかり云ふのだつて。船へ乗るのだと云つて、起き

上つたこともあつたさうだよ。泳ぐのだと云つて、着物を脱ぎ懸けたこともあつたさうだよ。さうして熱の一番高かつた時などは、まるで魚のやうに手を動かして、寢床の上を轉がり廻はつたつて話だつたよ。
〔間。〕その時のことで自分でもよく覚えてゐるのは、お母さんの聲が聴えたことだけなの。お母さんは悲しさうな聲で、早く山からお遁げ、それでないか酷い目に會ふよつておつしやつたの。
おせつ。山にゐると酷い目に會ふんですつて。

〔この時ダイナマイトの響きじく聴ゆ。梟の聲止む。舞臺の情調一變す。次郎は覺醒せるものの如く起き上る。二人の女の驚きて留むるを振り離して、勝彌の傍に近寄る。〕

次郎。(叫ぶ。)もう大丈夫だ。さあ、早く山を返して呉れ。(怒に震へつつ)な

あに、貴様がいくら何と云つても、己は如何しても取り返すぞ。

勝彌。何だ。まだそんなことを云つてつゐるのか。

次郎。うん。己は山を取り返すまで云つてゐるのだ。

〔二人は互に凝視しつ立つ。二度怖しき一瞬間。友彦は驚きて振返る。〕

勝彌。己は貴様のやうな氣狂ひから、そんなことを云はれる覚えがないのだ。(手早く帽子と外套を取る。) さあ、静緒。出懸けやう。

静緒。(躊躇。短き間。) 私は厭でございます。お一人でいらつしやいませ。次郎。そのかはりに己が一所に往つてやらう。

勝彌。(次郎に。) お前なんぞ黙つてゐる。(娘に。) 何故己と一所に出懸ないのだ。

静緒。わんまり眞つ暗な夜ですから。

勝彌。(苛立つ。) さあ、そんなことを云はずに、早く出懸けやうぢやないか。

静緒。私は如何しても厭でございます。

勝彌。(憤怒と恐怖と相半ばせる表情。) さうか。それならお前の勝手にしろ。己はこれから一人で往く。

次郎。(狂ほしく笑ふ。) 己が一所に往くから安心するが好い。

勝彌。(次郎の方を振り返る。) 一所に来るなら来て見ろ。

(勝彌は足早に右方の扉口より去る。次郎は踰眼としてその後を追ふ。おせつ續いて走り往かむとす。静緒は冷かにその人々の後を見送る。)

静緒。(おせつに。) お止し。お止し。往つたつて仕方がないよ。

おせつ。それでも如何なるか心配ですもの。

静緒。なあに、なるやうにしかならないのだから。

友彦。(慌ただしく角燈に火を點す。) 一寸僕が往つて來ませう。

(友彦は右方の扉口より去る。二度梟の聲寂しげに聽ゆ。)

おせつ。如何なるでせう。大丈夫でせうか。

静緒。そんなに心配する程のことはありはしないよ。

おせつ。それでもひよつと飛んでもないことになりますと大變ですからねえ。私は一寸往つて見てまゐりますよ。

(おせつは急ぎて右手の扉口より走り去る。静緒は猶冷かに後を見送る。)

静緒。(獨語。) 皆如何したと云ふのだらう。(靜かに窓際に歩み寄り外を覗く。) まあ

外はあんなに眞つ暗だのに。

(長き間。静緒は殆んど動かさずして暗黒なる夜を凝視す。梟の聲。)

静緒。(暖爐の傍へ来る。) 何だか急に寒くなつて来た。

(この時正面の扉を開きて若き坑夫十藏入り来る。大股に静緒の傍へ歩み寄る。)

十藏。(帽子を脱ぐ。) お嬢さん。私は一寸お願があつて来たのですが、聽いて下さいませうか。

静緒。(恐怖。) お前さんは誰なの。

十藏。私は十藏と云つて、あなたのお父さんに使はれてゐる坑夫ですよ。

静緒。まあ、何處からこの部屋へ這入つて来たの。

十藏。(正面の扉を指差す。) あの扉からですよ。下からずつと鐵の梯子を登つ

て来たのです。

静緒。まあ、鐵の梯子があるの。さうしてお願いひと云ふのは。

十藏。なわに何でもないとなんです。(金庫を指差す。) あの中に這入つてゐる金きんをすつかり私に下さいませんか。

(長き間。梟の聲。)

静緒。(恐怖の表情全く消え去る。) ええ。好いとも。併し、私は鍵を持つてゐないんだよ。

十藏。(衣兜より鍵を取り出す。) 鍵はここに持つてゐますよ。

(十藏は金庫に近付きて、徐かに重き扉を開く。大いなる黄金の塊を手に握りて立つ。)

静緒。その金きんを何處へ持つて往くの。

十蔵。海へ持つて往くのです。

静緒。まあ、海へ。

十蔵。ええ。私がこの金きんを持つて来るのを、坑夫達は皆待つてゐるので
す。これからこの山にゐる大勢の坑夫は皆海へ往つてしまふのです。
まだ残つて働いてゐる奴もありませんけれど、そいつ等ももう直き海へ
往く氣になるでせう。

静緒。如何して皆海へ往く氣になつたのだらう。

十蔵。(微笑。) 私が皆に海へ往けと云つたのですよ。

静緒。如何してそんなことを皆に云つたの。

十蔵。海へ往く方が皆の幸福になりますから。

静緒。何故。

十蔵。海には生命がありませんから。

(やや長き間。女の眼には次第に喜びの色現はる。)

静緒。まあ。

十蔵。(金塊を袋の中に收めつつ。) ああ、この山にはもう直き一人もゐないやう
になりますよ。さうしてもう大抵掘り盡してしまつて空虚になつた山
には、あなたのお父さんと次郎とたつた二人が残つてゐるばかりにな
るでせう。さうして二人で何時までもこの山を奪ひ合つてゐるでせう。

(ダイナマイトの響烈しく聴ゆ。)

静緒。まあ如何したんだらう。

十蔵。あれは坑を壊してゐるんです。もう是から誰も坑の中に這入れないやうに、ダイナマイトで壊してゐるんです。

静緒。今にここも如何かするのぢやないの。

十蔵。こんな家は焼拂てしまふでせう。

静緒。まあ如何したら好いだらう。

十蔵。それぢやあ私と一所にいらつしやい。お怪我のないやうに、あなたのいらつしやりたい所へ送り届けて上げますから。

静緒。(柔順に。) ええ。

十蔵。さあ、それぢやあ出懸けませう。

(十蔵は右方の扉口の方へ大股に歩む。静緒もこれに續きて歩む。ダイナマイトの響。おせ

つ右方の扉口より走り出づ。顔青ざめて唇顫ふ。)

おせつ。何だか街の方は大騒ぎですわ。(十蔵と顔を見合はす。) まあ、如何してここに來てゐるの。

十蔵。金を盗みに來たんだよ。

静緒。お父さんは見付かつたかい。

おせつ。いいえ。何處へ往つたものか、如何しても見付からないのですよ。そのうち街の方を見ると方々に火が見えるのですもの、驚いて駈けて來たのですわ。

(ダイナマイトの響。遠く家畜の悲鳴。其他の怖しき音微かに聴ゆ。殆んど同時に右手より騒がしき群集の聲音近付き來る。)

静緒。おや、誰だかここへやつて来るやうだね。
おせつ。まあ、大勢のやうですねえ。

(一群の坑夫等右方の扉口より入り来る。すべて第一幕に現はれたる人物なり。)

一人の坑夫。十蔵。皆はお前を待つてゐるんだぜ。

他の一人の坑夫。如何したんだ。金はあつたのか。

十蔵。うん、今往かうと思つてゐた所だ。

一人の坑夫。さうしてこの女は。

他の一人の坑夫。やつぱり海へ連れて行くのか。

十蔵。いやこの人達の往きたい所まで送り届けてやるのだ。(間。)さうして
皆は何をして居るのだ。

(坑夫等は口々に答ふ。)

坑夫等の聲

○坑を崩してゐる奴がある。

○家を焼いてゐる奴がある。

○電線を断つてゐる奴がある。

○鐵道を壊してゐる奴がある。

○犬を屠つてゐる奴がある。

○鶏を殺してゐる奴がある。

(凄じきダイナマイトの響。)

十蔵。(二人の女に。)さあ、あなた方は早く何處へ行くかお極めなさい。何處

へでも私達が送り届けて上げますから。

おせつ。何處でも好うございますわ。

十蔵。(静緒に。)あなたは何處へ往きたいのです。(静緒答へず。間。)さあ、早く何處とでも云つて下さい。それでないと如何することも出来なくなりますせ。

静緒。(迷へる調子。)私は海へ往きたいのだけれど。

十蔵。それなら私達と一所に來れば好いちやありませんか。

静緒。さうねえ。(やや長き間。)それぢやあ一所に海に往くことにしやうよ。十蔵。(頷く。)よろしい。(坑夫等に。)それぢやあ出懸けやう。(歩まむとして足を留む。)待て。待て。まだ皆忘れてゐることがあるな。

三四人の坑夫。(同時に。)何だ。何だ。

十蔵。お前達は、まだあの湖の傍に立てゐるあいつの家を何ともしないだらう。

(坑夫等遠かに騒ぎ始む。)

坑夫等の聲

○焼いてしまへ。焼いてしまへ。

○あんな家が立つてゐると。

○あの湖の穢れだからな。

○焼いてしまへ。焼いてしまへ。

(坑夫等は荒々しき聲音を残して右方の扉口より去る。)

〔戯曲〕 戯

六

静緒。ああ、あの家を焼いてしまふのだね。(間) あんな家は如何なつたつて關はないわ。

十蔵。さうですとも。あんな家は焼いてしまつた方が好いのです。

(突然すべての電燈消ゆ。舞臺は暗黒となる。)

十蔵の聲。やあ、この近所の電線を断りやがつたな。

(坑夫等の悲しげに歌ふ聲聴ゆ。)

坑夫等の歌(二度)

坑夫する身と、

空飛ぶ鳥は、

何處のいづこで、

果てるやら。

おせつの聲。まあ、あの人達ですね。だんだん遠くなつて往くあの歌は。

(坑夫等の歌ふ聲次第に遠ざかる。その聲の全く聴えずなりし時、幕靜かに下つて暗黒なる舞臺を包む。)

〔戯曲〕 夜

九

第三幕

この幕をこの戯曲の EPILOGUE とす。

第一幕と同じ舞臺面。されどかの「永遠の壁」に向つての長さ凝視は、更に怖しき不安と、更に怖しき鬱憂と、更に怖しき懷疑とに、我等が心を誘はむとす。この痛ましき場景の中において、微かに胸の顫慄を強ふるものは、第一幕と同じくかの遠き湖なり。坑夫等に焼れつゝある家の火光を映して水の面極めて赤し。

観客よ。この時聲高く人と語りて、この死の如き寂寞を破り給ふな。

第二幕より數時間を経過す。曉に近し。冷かに笑へる「夜」は、その大いなる黒き手に攔める或る運命を、我等が前に擲ちて去らむとす。

（幕の静かに上がりし時、舞臺は空虚なり。やがて右方より聲音の近付き来るを聴く。烈しく争ふ聲すると同時に、勝彌と次郎出づ。勝彌は驚愕と恐怖との爲めに疲労して、苦しげに歩む。次郎は猶第二幕の如く興奮して、狂へる如く歩む。遠き火光に依りてその動作を見るを得るのみ。その表情の如きは殆んど認め難し。）

勝彌。まだ附いて来るのか。何處まで附いて来る氣なのだ。

次郎。何處まででも附いて往く。

（勝彌は運搬車に躓きて倒れむとす。次郎はこの音を注意深く聴く。二人立留る。）

次郎。ふん。何かに躓いたな。

勝彌。躓からが躓くまいが己の勝手だ。餘計な事を云はずに黙つてゐる。

次郎。そんなことを云つて、今に谷の中へ墜ちるな。

勝彌。己が墜ちればお前も墜ちるのだ。(やや長き間。何ごとか傾聴す。) ああ、もう何にも聴えなくなつた。(嘆息。) ああ、これでやつと安心した。(運搬車に腰を懸く。)

次郎。まだ中々安心が出来るものか。あの坑夫達の手から遁げても、己の手からは中々遁がさないからなあ。

勝彌。遁がしないと云つても、遁げてしまへば仕方がないぢやないか。併し、お前は今そんなに己を遁がしないと云ふ位なら、先きあの坑夫達に出會つた時、何故己がここにゐるから捕へると云はなかつたのだ。次郎。あいつ等に捕へられて堪るものか。己は己一人のことで、かうやつ

て貴様を遁がさないのだ。この山はあいつ等の山ぢやないのだからなあ。己一人の山なのだからなあ。(強く。) それだから己は如何してもこの山を取り返すのだ。

勝彌。己はもうその言葉を幾度聴いたか分らないよ。

次郎。うん。己は幾度でも云ふのだ。己がこの山を取り返すまで云ふのだ。

勝彌。勝手に一人で云つてゐるが好い。そのうちに誰か来て、氣狂ひ病院でも監獄でもお前の好きな方へ連れて往つて呉れるだらう。

次郎。貴様こそ連れて往かれないやうに氣を付けろ。(間。) さあ、もう歩けなくなつたのか。こんな所にゐても仕方がない。(四邊を見廻す。息詰まる如く叫ぶ。) おお。ここはあの坑の前だ。貴様が己を生理めにしたあの坑の

前だ。

勝彌。(驚愕。)あの坑の前だと。(間。)如何してこんな所へ来たのだらう。

次郎。うん、己はもうここを動かないぞ。さうして貴様もここから動かさないぞ。さあ、ここで己は貴様からこの山を取り返すのだ。ここに來ればいくら貴様だつて、この山は己のものだと云ふことは出來ないだらう。(坑口を指差す。)その坑が己の始めて掘つた坑だ。さうしてその坑が己がお前に始めて會つた坑だ。(強く地を踏む。)丁度ここいらの所で、氣絶した己が呼吸を吹き返したのだ。丁度今貴様があるあたりの所に、貴様は立つてゐたのだ。その時は汚い着物を着て、脚絆懸けの草鞋穿きで、見すばらしい姿をしてゐたな。

勝彌。併し己が助けてやらなければ、あの時お前は死んでゐるのだせ。

次郎。あの時死んでしまつた方が餘つ程好い。あの時なら己はこんな苦痛もこんな悲哀も知らずに、地に抱かれて喜んで死んだらう。併し、もう駄目だ。あの坑の中に埋められてからと云ふものは、己は苦痛と悲哀とで生きて來たのだ。さうして死ぬと云ふことが、どんなに苦しくどんなに悲しいかと云ふことを知つたのだ。おい。貴様は死ぬと云ふことが、どんなに苦しいかどんなに悲しいか知つてゐるか。

勝彌。知つて、ゐるとも。多分お前よりもよく知つてゐるだらう。

次郎。それでは貴様は、あの湖で死んだ女が、どんなに苦しくどんなに悲しかつたか知つてゐるのだな。(間。)よし、それぢやあ己はあの女に代

つて、もう一つ貴様から取り返すものがある。

勝彌。何だ。

次郎。苦痛と悲哀とを取り返すのだ。

勝彌。(嘲るが如く笑ふ。)ふん。そんなものを取り返すことが出来るものか。

次郎。(強く。)いや。いくらでも取り返すことが出来る。

勝彌。如何するのだ。

次郎。同じやうな苦痛と同じやうな悲哀とを、貴様にさせればそれで好いのだ。

勝彌。そんなことが出来るかい。

次郎。出来るとも。

勝彌。出来るならやつて見ろ。

次郎。よし。(飛び懸かりて勝彌の咽喉を握む。)

(怖しき一瞬間。暗黒の中にて二人の闘ふ音。)

勝彌。(苦しげに。)お前は己を殺さうとするのだな。

次郎。(喘ぎつつ。)さうだ。さうすれば貴様から、苦痛と悲哀とを取り返すことが出来るのだ。

勝彌。取り返せるなら、取り返して見ろ。あべこべにやられるな。この手を放せ。この手を。

次郎。この手を放して堪るものか。

(二度二人の闘ふ音。勝彌は運搬車より地上に落つ。次郎は勝彌の上に跨がる。この時遠く

〔戯曲〕夜

坑夫等の悲しげに歌ふ聲聴ゆ。

坑夫等の歌

坑夫かなしや、

淋しい夜半は、

ダイナマイトを

抱いて寝る。

(この歌の旋律は第二幕に歌へるものとすべて同じ。)

次郎。ああ、誰かわの歌を歌つてゐるな。

勝彌。何を云つてゐるのだ。歌なんぞは何でも好い。

(次郎の手緩むと同時に、勝彌は起き上る。次郎は地上に倒る。勝彌は左方へ走り入る。次

郎は苦しげに呻吟す。)

次郎。(起き上る。) 如何して遁がして堪るものか。(間。) 何處までも附いて往く。何處までも附いて往く。

(次郎は踵踵として左方へ進む。)

次郎。(湖の面に映れる火光を認む。) うん。あいつの家が焼けてゐる。もうあの女が住んでゐた家もなくなつてしまふのだなあ。(強き調子となる。) 己はあの女に代つて、如何しても取り返すのだ。

(次郎は左方へ入る。舞臺二度空虚となる。友彦坑夫の如き服装にて、右方より出づ。)

友彦。(左方に来る。) 今こゝにゐたのは次郎のやうだつたな。澁川さんは如何したのだらう。坑夫等に殺られたのぢやないだらうな。

〔右方に群集の聲音を聴く。〕

友彦。(恐怖。) ああ、また坑夫等がやつて来る。

〔友彦は左方へ走り入る。右方にて坑夫等の烈しき叫聲聴ゆ。〕

坑夫等の聲

- 火を付ける。火を付ける。
- 焼けるものは皆焼くのだ。
- 打ち壊せ。打ち壊せ。
- 壊せるものは皆壊すのだ。
- 奪ひ取れ。奪ひ取れ。
- 取れるものは皆取るのだ。

〔一群の坑夫等右方より出づ。すべて掠奪後の残酷なる感情に酔ひて、狂へる如く烈しく叫ぶ。カンテラを携ふる者と松明を携ふる者と相半す。舞臺明るくなる。〕

坑夫等の聲

- 火が見える。火が見える。
- あいつの家を焼いてゐるのだ。
- 湖にあんなに火が映つてゐる。
- 焼け落ちる音がここまで聴える。
- あの家を一番終ひに焼いたのだ。
- あすこに往つた奴等がもう来る時分だ。
- 盛んに燃える。盛んに燃える。

○皆あの火を見ろ。皆あの火を見ろ。

〔坑夫等は舞臺の中央に集まりて火を眺む。この中に鷓を擁へたる坑夫あり。假に「鷓」の礦夫と名付く。鷓の頸を握り、高く振りつつ叫ぶ。〕

「鷓」の坑夫。あんな家が焼けるのを見てゐたつて仕方がない。それより己の取つて来たこの鷓を見ろ。

一人の坑夫。そんな鷓を見て如何するのだ。

「鷓」の坑夫。如何しろと云ふのぢやない。唯この鷓を見てゐる方がまだ増しだと云ふのだ。（瞥むる如く。）あんな火を見てゐると、皆盲目になつてしまふぞ。

〔坑夫等は、この聲を聽きて、口々に叫びつつ左方に歩み始む。〕

坑夫等の聲

- さうだ。早く往かう。
- 海へは餘程遠いだらう。
- 急いで歩かなければ。
- 中々往かれない。
- 海へ往くのを忘れるな。
- さうだ。早く往かう。

〔坑夫等は左方に入る。舞臺二度暗くなる。「鷓」の坑夫のみ一人残る。〕

「鷓」の坑夫。（湖の方を見る。）何だ。もう大抵焼けてしまつたぢやないか。（鷓を見る。）うん。こいつはもう絞め殺してしまはう。（鷓を絞め殺す。）併し、

こいつを食ふのには火が入るな。(鷓の死骸を地上に置き、燃料を求む。)

(十蔵は、静緒、おせつとともに右方より出づ。)

十蔵。(静緒に。) 疲れたでせう。お嬢さん。

静緒。いいえ。ちつとも。

(〔鷓〕の坑夫と十蔵と近付く。模索。)

〔鷓〕の坑夫。誰だな、そこにゐるのは。

十蔵。己だ。十蔵だ。(問。) お前は誰だ。

〔鷓〕の坑夫。お前の飯場にゐるものだよ。

十蔵。さうか。こんな所で一人で何をしてゐるのだ。

〔鷓〕の坑夫。鶏を取つて来たから、こいつを食はうと思つてゐる所だ。何處

かそこいらに焚木になる物はないかな。

十蔵。何かあるだらう。捜して見ろよ。

〔鷓〕の坑夫。うん。あつた。あつた。

(〔鷓〕の坑夫は運搬車の碎けたる部分を拾ひ集む。十蔵と二人の女とは湖の方を眺む。)

おせつ。まあ、まだあんなに燃えてゐますわ。

十蔵。うん。盛んに燃えてゐる。お嬢さんもあすこに往つてゐたら、焼け

死んだかも知れませんね。

静緒。さうだねえ。あの家にゐた留守番の爺やは如何したらう。

十蔵。そんな奴は大丈夫ですよ。ちやんと火を付ける前に遁がしてしまつたでせう。

静緒。お母さんのお形見のものは皆あの家に置いてあつたのだよ。そんなものはそつくり焼けてしまつたらうね。

十藏。そうですねえ。それは焼いてしまつたかも知れませんよ。

静緒。私はそれだけが悲しくつて仕方がないのだよ。

おせつ。そうでせうねえ。お母さんのお形見なんですからねえ。

静緒。さうさ。私はまだそのお形見を見たことがないのだよ。それだからそれが見たくつてあの家へ往かうと云ひ出したの。さうして来て見るとこの騒ぎだらう。もう如何することも出来やしないぢやないか。

おせつ。併し、皆焼けてしまつたか如何かまだ分りませんよ。誰かそのお形見の中から何か取つてまゐりますわ。

静緒。さうして呉れると嬉しいわねえ。

十藏。さうですね。何か持つて来るかも知れませんよ。

(この間に「鶉」の坑夫は火を燃し始む。舞臺微かに明るくなる。)

「鶉」の坑夫。(十藏等に。)火が出来たせ。當つたら好いだらう。

十藏。お嬢さん。火にお當りなさい。

静緒。私はそんなに寒くないから好いよ。(おせつに。)お父さん達は如何したらうねえ。

おせつ。私も先きからそれが心配でならないのですよ。あんな様子でしたから、ひよつとすると飛んでもないことになつてやしないかと思ふのです。

十蔵。大丈夫だよ。安心してゐるが好い。

〔鷓の坑夫。(火の傍に踏みて、鷓の毛を捲りつゝ。) そりやあ如何だか分らないぞ。

こんな夜には人間の方ぢや分らないことが澤山あるものだからなあ。

十蔵。黙つてゐろ。お前の知つたことぢやない。(問。) お嬢さん。先き話し

懸けた船のことの續きを話させうか。

静緒。ええ。あれからお前の乗つてゐた船は如何したの。

十蔵。(誘惑の調子。)それから船をその島に着けたのですよ。さうするとその

島の海岸にある砂は、まるで血のやうに眞つ赤なんです。後で鑛泉が

海岸にあるものだからさうなるのだと分つたんですが、始めは皆驚い

てしまつて、誰も上陸すると云ふ者がないので。併し、何時まで見

てゐても仕方がありませんから、私と外に十人ばかりが上陸すること
になつたのです。

(焚火次第に盛んに燃ゆ。「鷓」の坑夫は鷓を炙り始む。二人の女は次第に火の傍に近寄つて十蔵の物語を聴く。)

〔鷓の坑夫。(獨語。) 何だ。出鱈目を云つてゐらあ。

十蔵。何だ。黙つてゐろ。(問。) それから上陸して見ると、何處へ往つても
珍らしいものばかりなのです。樹は皆まだ見たこともない樹ばかりだ
し、鳥も皆まだ見たこともない鳥ばかりなのです。だんだん奥の方へ
進んで往くと、大きな森がありました。この森の樹は皆圓い形をした
同じ位の高さのものばかりなのです。あんまり不思議ですから、私達

は暫くその森の前に立つたきりで、中に這入ることが出来ませんでした。併し、人が住んでゐない島のことだから、危いこともないだらうと思つて、皆一所にその中へ這入つて往つたのです。さうすると丁度その森の真ん中の所に綺麗な池がありました。さうしてその池の岸に、一人のお爺さんが座つてゐるのです。

静緒。まわ、お爺さんがたつた一人で。

十藏。ええ、たつた一人で。(間)それからそのお爺さんは私達の跫音を聞き付けて一寸振り返つて見ましたが、また池の方を向いてじつと何か考へてゐる様子なのです。

〔鶏の坑夫。(鶏を裂きて食ひ始む。獨語。〕よくまわあんな嘘が話せるなあ。

十藏。(怒るが如く。)黙つてゐる。お前に何が分るものか。そいつを食つたら早く往け。(間)皆怖がつて誰もそのお爺さんに近付く者がないので、仕方がないから私が近付いて、そのお爺さんにここは何處だと尋ねたんです。さうするお爺さんは力のある聲でここは「幸の島」だと答へたんです。さうして傍に置いてあつた魚籠の中から、銀色の魚を取り出して、私の掌の上に載せました。さうしてこれを食べると、女の秘密がよく分ると云つたんです。

〔鶏の坑夫。(鶏を食ひ終る。獨語。)何だ。また女の秘密だつて云つてゐらあ。昨夜の話とはすつかり違つてゐるのに。

十藏。黙つてゐる。さあ、食つてしまつたのなら早く往け。

〔鷓〕の坑夫。(立ち上る。) ああ、うまかつた。どりや、もう少し何か取つて来てやらう。

〔鷓〕の坑夫は右方に入る。

十藏。何だい、あいつは。(間。) あいつは海に往かない氣なのだな。

(この時右方より群集の跼音聽え來る。)

おせつ。おや。大勢こつちへ來るやうですね。

静緒。さうだね。きつとあの家を焼きに往つた人達なんだよ。お母さんのお形見を持つて來て呉れると好いのだがね。

おせつ。さうですねえ。あら、あんなに大きな聲で話し合つてゐますよ。

十藏。(喜ばしげに。) ああ、皆やつて來る。(二人の女に。) あれは皆海へ往く奴等

なんですよ。

(坑夫等の叫聲、極めて近く右方より聽ゆ。)

坑夫等の聲

○まだ火が見えるやうだ。

○まだ煙が見えるやうだ。

○あんなによく燃えた火は見たことがない。

○あんなによく焼けた家は見たことがない。

○己は三度燄の中へ飛び込んだ。

○己は三度煙の中へ巻き込まれた。

○己の手の火傷を見ろ。

○己の足の打創を見る。

(一群の坑夫等右方より出づ。前に通過せる一群よりも人数多し。カンテラを携ふる者なく松明を携ふる者のみなり。火傷を白き布にて巻ける者あり。仕事着の袖を焦せる者あり。舞臺二度明るくなる。すべて火に酔ひて狂へる如く叫ぶ。)

坑夫等の聲

○急げ。急げ。

○夜の明けないうちだ。

○この眞つ暗な夜の明けないうちだ。

○さうしないと海へ往かれぬ。

○急げ。急げ。

○山から早く離れるのだ。

○この怖しい山から早く離れるのだ。

○さうしないと海へ往かれぬ。

(坑夫等は舞臺の中央に来る。十蔵等を認めて足を留む。)

一人の坑夫。十蔵。そこに何をしてゐるのだ。

十蔵。お前達を待つてゐたのだ。

他の一人の坑夫。己はもうお前は山にゐないと思つてゐた。

十蔵。さうか。外の奴等は皆もう往つてしまつたよ。(間) ああ。お前達は

あの家から何か取つて来たらうな。

他の一人の坑夫。うん。いろんな物を取つて来たよ。

十蔵。どんな物を取つて来たか見せて呉れ。

〔坑夫等は口々にその品物の名を叫びて地上に置く。〕

坑夫等の聲

○己は筐を持つて來てゐる。

○おや、己の衣兜のを攫つたな。

○己は瓶を持つて來てゐる。

○同じものがここにもある。

○己は鍵を持つて來てゐる。

○そんなものを如何するのだ。

〔静緒は女らしき注意を以てこれ等の品物を眺む。〕

十藏。〔静緒に。〕お嬢さん。お母さんのお形見のやうなものがあつたらお取

りなさい。

静緒。一寸この筐を見せて下さいな。

十藏。好いから御覽なさい。

〔静緒は蓋を取りて蓋を開く。おせつその中を覗き込む。〕

静緒。何だらう、これは。

おせつ。綺麗なものですわねえ。

十藏。〔筐の中を覗く。驚愕の表情。〕眞珠だ。眞珠だ。如何してこんなに澤山眞

珠があつたんだらう。

〔坑夫等は顔を見合はせて私語す。一人の坑夫は焚火に燃料を加ふ。〕

静緒。眞珠つて何なの。

十蔵。これは海の底から取れるものなのですよ。

静緒。まあ、海の底から取れるんですか。

十蔵。それも深い海にばかりあるのです。一つや二つはこんな山にあつても不思議はないのですが、こんなに澤山如何してあつたんだかなあ。一人の坑夫。それは死んだ奥さんの部屋だつた所にあつたんです。

静緒。それではやつぱりお母さんのお形見なんだねえ。(十蔵に。)これは私が貰つても好いのかい。

十蔵。(坑夫等に。)お嬢さんに上げてても好いだらう。(坑夫等頷く。静緒に。)好いから持つていらつしやい。

おせつ。私にも少し下さいませんか。

静緒。ああ、上げるとも。二人で半分づつ分けやうね。その代りこれから

姉妹にならなくつては厭だよ。

おせつ。ええ。好うございますとも。

(二人の女は眞珠を分つ。次第に弱りつつも湖に映りたる火光は、この時全く消ゆ。)

十蔵。(二人の女に。)さあ、それぢやあ早く往きませう。先に出懸けてゐないと直ぐ皆に追ひ越されてしまひますせ。(坑夫等に。)己達は一足先に往くよ。

(十蔵は徐かに左方へ入る。二人の女もこれに従ひて左方へ入る。坑夫等は二度叫び始む。)

坑夫等の聲

○もう火が消えた。

- 湖に光が映らなくなつた。
- また眞つ暗になつてしまつた。
- 併し、もう直きに夜が明けるだらう。
- さうだ。己達はかうしてはゐられないな。
- 早く海へ往かなければならない。

（坑夫等は左方に向つて歩み始む。この時勝彌慌たたく左方より出づ。坑夫等を認て二度左方へ入らむとす。）

一人の坑夫。あいつだ。あいつだ。
他の一人の坑夫。捕まへろ。捕まへろ。

（二三人の坑夫勝彌を捕ふ。坑夫等はすべて殘酷なる表情を示す。口々に叫ぶ。）

坑夫等の聲

- 打つ殺せ。打つ殺せ。
- どんなに己達を苦しめたらう。
- こいつの爲めに死んだ奴がある。
- 石に食ひ付いて死んだ奴がある。
- 生き埋めにしたら如何だらう。
- 打つ殺せ。打つ殺せ。

（敵人の坑夫は勝彌に對して、無智なる復讐的動作を爲す。怖しき一瞬間。悪行終る。勝彌は屍體となりて舞臺の中央に横はる。夜漸く明けむとす。）

坑夫等の聲

- さあ。往かう。往かう。

○これでもうすつかり終つた。
○あの哀れな死態を見る。
○まるで獣のやうに死んでゐる。
○夜が明けかかつて来た。
○さあ。往かう。往かう。

〔坑夫等は口々に何ごとか叫びつつ左方へ入る。舞臺空虚となる。長き間。坑夫等の悲しげに歌ふ聲聴ゆ。〕

坑夫等の歌(三度)

坑夫する身と

空飛ぶ鳥は、

何處のいづこで

果てるやら。

〔この時左方にて老坑夫が第一幕の時の如く叫ぶを聴く。〕

次郎の聲。(地の中より呼ぶが如く)……おおい……何處へ往つてしまつたのだ

……己は何處まででも附いて往く……己は何處まででも附いて往く……

〔曉の光仄白く舞臺の上に差し来る。左方より次郎出づ。何ものか求むる如き眼差。前よりも更に興奮したれども、疲労の色著しく顔に現はる。〕

次郎。何處へ往つてしまつたらう。(間)如何してあいつを遁がして堪るものか。

〔坑夫等の悲しげに歌ふ聲二度聴ゆ。哀調次第に遠ざかる。〕

坑夫等の歌

黄金堀りつつ、

こぼした涙、

泌みて今夜は

石が泣く。

次郎。(歌の聴ゆる方を望む。落涙す。) ああ、もう皆往つてしまつたな。己はもうあの歌を聴くことが、出来なくなつてしまつたのだ。己も皆と一所に往きたいけれど、己は生れた時からこの山を離れることが出来ない體になつてゐる。己はこの山の地を抱いて死ななければならぬのだ。皆達者で海へ往つて呉れ。さうしてしつかり海で働いて呉れ。(間。) もう歌も聴えなくなつてしまつた。ああもう皆往つてしまつたのだなあ。

(やや長き間。曉の光朧銀色となる。次郎は無意識に舞臺の中央へ歩む。始めて勝彌の屍體を認む。)

次郎。(驚愕。) おお。ここにあいつが死んでゐる。(近付く。) 口から血を吐いてゐる。顔は土色になつてゐる。到頭坑夫達に殺されてしまつたのだな。(運搬車に腰を懸く。悲しげに獨語す。) ああ、己と貴様とは如何してこんなに敵になつたのだらう。あの時丁度貴様がこの坑の所を通り懸つたばかりに、死ぬまでこんなに争つてゐなければならなかつたのだ。さうしてその争ひはお前が死んだので今やつと終つたのだ。(やや長き間。怒の表情を示す。) いいや、争ひはまだ終らぬ。あの女に代つて取り返すものを今やつと取り返しただけなのだ。己はこれからこの山を取り返さなけ

ればならない。(立上がりて衣兜より破れたる圖面の紙片を掴み出す。) さあ、己の山を返して呉れ。己の山を返して呉れ。(勝彌の屍體の傍に来る。)

(暁の光白金色となる。)

次郎。(突然四肢痙攣す。顔は灰色になり、眼を大きく見開く、苦しげに叫ぶ。) 己は如何しても取り返す。己は如何しても取り返す。(肩も胸も怖しき迄震へ、眼眩むと同時に、勝彌の屍體の上に重なり合ひて倒る。) 山を。山を。(心臓破裂して死す。)

(夜全く明く。哀れにも「夜」の犠牲となりし二人の屍體は、息絶えても猶争ふが如き形をして悲しげに地上に横はる。幕。)

戯曲

白き鳥

(一幕)

〔戯曲〕

白き鳥

老いたる牧者。
牧者の妻。
牧者の子。
牧者の娘。
早馬使。
旅人。
村民の一群。
場所。
京師の郊外。

時代

第十世紀の初年。

京師の郊外に在る或村落の一部。中央に牧者の家あり。極めて簡素なる構造にして、且頽廢せむとする悲哀の色彩を帯びたり。家の左手の一部分は土間。獸を飼養するに必要な器物及び耕耘に用ふる農具などあり。家の右手は稍高くなりたる居間。貧しき牧者に適當なる調度の類を置く。正面の壁に出入口あり。唯一の他の居間へ通ず。その傍の壁には白き羊の皮が、他の色彩と極めて不調和に懸けられたるを見る。

家の前庭には籠に伏せられたる白き鷺鳥あり。死せるが如くに動かす。家よりあまり離れざる所に大河流れ、灌木と雜草の生ひたる岸邊より、銀の如き水面を現はす。その大河に沿ひ、この家の裏手を過ぎて、この村落を横斷する驛路あり。遠く圓形の山の連續せるを望む。初夏の日の午後。すべての氣分は舞臺の上に眠らむとす。

この戯曲の舞臺裝飾は或る部分まで象徴的なるを要す。

牧者の妻。五十四歳。溫和なる村婦の典型。質朴なる服裝、人間の母としての柔
かき情操を具へ、屢無智の美なるを示す。牧者の娘。二十一歳。その時代の新し
き思潮に觸れたる女。性質快活にして、容貌秀麗なり。やや華美なる服裝。小
き思想家の態度。二人白き鳥を眺めて對話す。

妻。まだ何も食べずにゐるぢやないか。如何したと云ふのだらう。

娘。さうですねえ。ああやつて眼をじつと閉つたきり身動きもしませんよ。まるで何か考へてゐるやうな様子ですねえ。

妻。まわで覽な。あの嘴の不思議な形だこと。私はこの年になるまでこんな鳥を見たことがないよ。

娘。さうですかねえ。昨日お父さんが買つて持つて来る道でも、大勢の人がみんなさう云つてゐたさうですよ。(間。)おや微かに眼を開けましたよ。

妻。おお、おお、可哀らしい眼を開けたねえ。

娘。(やや複雑に。)だが、あの眼は何を見やうとして開けたのでせう。

妻。さあ。

娘。何だか人を引寄せるやうな力を持つてゐる眼ですわねえ。(輕き驚愕の

表情。あら、この鳥は私の顔を見てゐますよ。あんなにじつと。

妻。まあ。(娘を見る。)おや、お前如何かおしなのかえ。

娘。(胸の頭へを強ひて制す。)いえ、いえ、如何もしやしません。(間。)おや、お母さん、あなた十年ばかり前に京で流行つた白い鳥と云ふ童謡わらべうたを覺えていらつしやいますか。

妻。ああ知つてゐるとも。それが。

娘。あの歌を何處かで歌つてゐるやうぢやありませんか。

(この時何處ともなく悲しげに歌ふ村童の聲を聽く。大河の彼岸なるが如し。)

童話の第一

白い鳥が、

禁裡様を睨んだ。

睨んだと思つたら、

捨てられた。

やれ、何處へ、白き鳥。

(靜かに靜かに風の音聴ゆ。)

妻。ああ、あの歌に違ひはない。併しあの歌はもう忘れられた時分なのに、

誰に教へられて歌つてゐるのだらう。

娘。あの歌の流行つた時分には、私達は京に住んでゐて、よく歌つたものでしたねえ。

妻。お父さんはまだ勇ましい武士で、劍を鳴らして京の大路を歩いていらしつたのだ。殊に馬がお上手で、いつも競馬くらべうまや騎射の時には、第一の猛者ともてはやされておいでだつたが。(間。)何時また元のやうになれることやら。

娘。お母さん。そんなことを云つたつて、もう仕方ありませんよ。

妻。さうだねえ。ついまたつまらない愚痴をこぼして濟まなかつたねえ。

(右手より老いたる牧者出づ。六十二歳。逞ましき骨組。白き髪と白き髯とは、この人の爲

めには極めて莊嚴なる裝飾の如く想像せらる。服装は所々破れて泥にまみれたる粗衣を着く。時代に壓せられたる人の苦痛は、明かにその額に認むるを得。聲は猶青年の如く力強き響を持ちたり。稍急ぎ足にて白き鳥に近寄る。

牧者。まだ眠つてゐるやうだな。

妻。ええ。何時までも身動きもしません。

娘。併し今微かに眼を開けました。

牧者。(白き鳥を凝視す。)如何もこの鳥を見てゐると、十年ばかり前に朱雀の大路で見た、あの鳥のやうに思はれてならぬのぢや。今日は宋の人が白い羊と白い鷺とを献する日だと云ふので、京の人々が群がつてゐる中に己も交つて立つてゐた。

娘。その時は私もゐましたわ。

牧者。さうだつたな。さうしてあの不思議な行列の過ぎるのを、お前は己の腕に抱かれて、嬉しさうに眺めてゐた。羊を入れた檻と鷺を入れた籠が、丁度己達の前に來た時、傍に立つてゐた若い者は、みんな喜ばしげに聲を上げた。併し傍に立つてゐた老人は、みんな苦々しげに顔を背けたのぢや。

妻。その時の鳥がこの鳥だとおつしやるのですか。

牧者。うん。昨日この鳥を賣つてゐた男が、己にかう云ふことを云つたのぢや。(その男の調子を摸す。)なあ、翁どの。この白い鳥は珍らしい鳥で、京の或る館から買つて來たのぢや。併しあまり不思議なので何處へ往

つても賣れぬのぢや。如何ぢや。お前には綺麗な娘があるさうなが、その娘の黒髪を三本と換事せうぢやないか。(間。)とかう云つたのぢや。娘。ああ、それでお父さんは私のところへいらしつて、黒髪を三本抜いて呉れとおつしやつたのですね。

牧者。さうぢや。さうしてこの鳥と換へて來たのだが、成程あの男の云つた通り、不思議な鳥に違ひない。

妻。(思ひ出したる如く。)それぞれ、今あの河邊で村の童が何時か流行つた白い鳥の歌を歌つてゐました。不思議な時に不思議な歌を歌ふものぢやありませんか。

娘。あの歌は昔私も歌ひました。

牧者。(不安の表情。)なに白い鳥の歌だと。(やや長き間。)あの白い鳥は何處へ往つたらう。ひよつとすると己の思ふ通り、この鳥が十年まへのあの鳥かも知れないなあ。

(三人白き鳥を環視す。長き間。靜かに恐怖の感情舞臺の上に現はれ來るを見る。)

娘。まだ眠つてゐますわ。

妻。少しも身動きをしません。

娘。(父に。)如何したと云ふのでせう。

牧者。何も不思議なことはない。これはこう云ふ鳥なのぢや。(間。)併してそれが若しあの時の白い鳥とすれば、早く殺してしまはねばならぬな。娘。何故でせう。

牧者。この鳥に見られた若い女は、みんな死んでしまふのぢや。妻。死んでしまふのですか。

娘。まわ。

（二人は眼を見合はす。娘は疑はしげなる恐怖の表情を示す。）

牧者。如何してそんなに驚くのぢや。

妻。さつきこの子をあの白い鳥がじつと見ましたから。

娘。私は死んでしまふのでせうか。

牧者。（痛しき笑。）さうばかりとは限らないよ。（間。決心の表情。）いつそこの鳥を殺してしまはう。（白き鳥の籠に手を懸く。）

娘。（父の手を支ふ。）いけませんよ。お父さん。私は何だかこの白い鳥が可哀

くなつて來ましたわ。

（この時二度前と同じ程度の遠さに童謡の聲を聴く。）

童謡の第二

白い鳥の

嘴に血が着いた。

着いたと思つたら、

遁げて往つた。

やれ、何處へ、白い鳥。

（静かに静かに風の音聴ゆ。）

牧者。(前の如き形を保つ。)あの歌は。

娘。やつぱり白い鳥の歌ですわ。

牧者。(娘より離る。)あの歌を聴くと何だか殺すのも怖しい。それにお前が殺すなと云ふのだから、まあ殺さないで置かう。(間。)併し如何してあんな歌を今頃歌つてゐるのだから。(妻の方へ歩む。)

妻。あの歌を聴くと何だか昔のことが思ひ出されてなりません。

牧者。うん。何だか悲しい心持になるなあ。(壁の白き羊の皮に眼を注ぐ。)今まで気が附かなかつたが、あの獣の皮もあの時見た白い羊のものやうに思はれる。(交る交る鳥籠と獣皮とを見る。)あれと云ひこれと云ひ、己の家へこんなものが集るのは、決して吉祥とは云はれないだらう。

(妻と娘はともに白き羊の皮を凝視す。)

娘。お父さんはそんなことをおつしやいますけど、何だか私はあの獣の皮が好きですわ。(間。)あれは兄さんが何處かで買つていらつしたのでしたわねえ。

妻。おお、さう云へば倅は如何したのだらう。

牧者。またいつもの鶏合せぢや。何處かの明地で、血しぶきを飛ばしながら勝負を争つてゐるのぢや。己の武士の魂があの倅にも傳はつて、荒々しいことばかりが好きになつてしまつた。

妻。あれがもつと優くして呉れたなら、さうしてもつとゑらくなつて呉れたなら、どんなに私達は仕合せになるでせう。

牧者。ゑらくなつて呉れと云ふのか。なわに馬追ひ牛追ひの伴はあれで澤山ぢや。(間。)それよりも娘お前は近頃如何したと云ふのぢや。毎日々々ぼんやり考へごとばかりしてゐるぢやないか。

娘。別段如何もいたしません。

牧者。いや、お前はまたあの美しくつて怖しい夢を見始めたな。(間。)さうだ。丁度あの白い鳥がこつちへ来る時分からあんな夢を見る奴が多くなつたのぢや。

妻。さうです。丁度その時分からです。まあ娘、お前はまたそんな夢を見てゐるのかい。

娘。ええ。あの夢だけは如何しても見ずにはゐられません。あれは私の命

ですもの。

牧者。命だと。

娘。ええ。命ですとも。(間。)お父さんもお母さんもまだお忘れにはなりません。一度盛んにあの白い鳥の歌が、京の童の間に流行つてゐる時分でした。私が門の前で遊んでゐるのを、阿倍晴明さまがご覧になつて、可哀相にあの女は天死ぢや、併し生きてゐる間は夢を見てゐるから幸福ぢやと、かうおつしやつたさうでした。

牧者。うん。確かにさう云はれた。

娘。私は晴明さまを信じてをります。それゆゑ生きてゐる間だけは、夢を見て暮らさうと心に決めました。併し心に決めるまでもなく、自然と

夢を見るやうになつてしまひました。

妻。まあ何と云ふ。

牧者。さう云ふのなら仕方がない。(白き鳥に眼を注ぐ。) さう云ふ夢を見る女には丁度好いから、その白い鳥もお前に呉れてやらう。

(牧者は反抗的に家の内部に入り、居間の中に座す。妻もこれに續く。娘は白き鳥の傍に立つ。やや長き沈黙。この時前よりはやや近く童謡の聲聴え來る。)

童謡の第三

白い鳥を

陰陽師が占つた。

占つたと思つたら、

ゐなかつた。

やれ、何處へ、白い鳥。

(靜かに靜かに風の音聴ゆ。)

娘。またあの歌を歌つてゐますわ。

妻。今日は如何してあの歌ばかり歌ふのだらう。

(牧者の子慌ただしく右手より出づ。二十七歳。牧者の子に似合はしからぬ奢侈なる服裝。豪邁なる態度。何處ともなくその面に精悍の氣あるを見る。)

子。(常ならざる表情。) 大變だ。大變だ。今村の者が大勢で、家へ押懸けて來る様子だぜ。

牧者。何だと。

子。如何も今朝から變だと思つたら、今村長むらなかの家へ集つてゐる所へ紛れ込んで、すつかり話を聽いて來たのだ。

妻。如何なことを話してゐたのだえ。

子。それが今云ふ通りこの家へ押懸けて來ると云ふことだつたのだ。

牧者。(怒る。)何故この家へ押懸けて來るのぢや。

子。それはあの白い鳥を飼つてゐると云ふ譯で。

〔娘。この白い鳥を飼つてゐるのが如何していけないのでせう。

子。(問。)うん、今話すから聽いて呉れ。何でも今朝何處からともなく一人の旅人がこの村に這入つて來たのだ。四十五六位の色の淺黒い眼の鋭

く光つた男だつた。丁度己は村はづれの丘の傍で、例の鶏合せをやつてゐたのだ。そこへその男がやつて來て東訛あづまりの言葉で、この村も近いうちに荒野になつてしまふが、それをみんな知つてゐるかと云ふのだ。妻。まあ、何者だらうね、その男は。

子。さあ、何者だか少しも分らぬ。一寸見た所では山法師のやうな姿をしてゐた。(問。)己達も氣味が悪いから、誰も返事をするものがなかつた。さうするとその男がまたかう云ふのだ。お前達の村には白い鳥を飼つてゐる者があるが、あの白い鳥がこの村を滅ぼしてしまふのだ。早く如何かしないと瞬く間だ。さうしてその男は振り返りもしずに村の方へ歩いて往つたが、それからきつと方々でそのことを云ひ觸らして歩

いたのだらう。何時の間にか村中の人が村長の家へ集るやうになつてしまつたのだ。(右手の方を望む。)こんなことを云つてゐるうちにも、もう押懸けて来るかも知れない。

牧者。それではあの白い鳥を殺して了へば、夫で何も起らずに済むだらう。併しあの旅人は、この村を滅ぼす爲めにお父さんがあの白い鳥を買つて來たと云ひ觸らしてゐましたせ。

妻。滅相な。何でそんなことを。

牧者。それでもあの白い鳥を殺して置けば、餘程村の人々の心も和ぐと云ふものだ。(子に。)お前その鳥を殺して呉れ。

子。よし。(白き鳥を籠より出さむとす。)

娘。(烈しく遮る。) いけませんよ。その白い鳥は私がお父さんから貰つたのです。如何して如何してむざむざ殺して好いものをですか。

子。だがこの鳥を殺さずに置くと、ますます騒ぎが大きくなるばかりだからな。

娘。いえ、いえ、家が滅されてしまはうが、村が滅びてしまはうが、如何あつてもこの鳥だけは殺すことが出来ません。

牧者。何故殺すことは出来ないのぢや。

娘。これは私の魂ですから。(間。)さつきこの鳥にじつと見られた時から私の魂はこの鳥に移つてしまひました。

(これより娘は白き鳥の傍を離れずに動作す。右手の方にて遠く群衆の騒擾を聴く。楚音、

叫聲、その他の雑音重く鈍く初夏の空氣を動かし來る。舞臺の上は暴風の前の如き沈黙に満され、牧者等の面には囚人の如き悲哀の表情を見る。

子。(右手を望む。) ああ、やつて來る。やつて來る。

牧者。(立ち上りて右手を望む。) おお、河に沿つた驛路を、黄色い砂埃を立てながらやつて來るな。

妻。まあ、如何したら好いだらう。

牧者。靜かにそこに座つてゐるが好い。まさか最初から手荒いこともしやしまら。

子。(猶右手を望む。) ぞ覽なさい。砂埃でよく分りませんが、あの一番先に立てゐる男は古めかしい鉾なんぞ持つてゐますせ。

牧者。(猶右手を望む。) だんだん近寄つて來る。だんだん近寄つて來る。(間。)

おお、みんな男ばかりぢや。

妻。(二度。) 如何したら好いだらう。

子。もう仕方がないぢやありませんか。如何なるか黙つて見てゐる外はありません。

(群衆の騷擾次第に近付く。牧者とその子は武士の如く待構ふる態度を示す。沈黙は次第に人々に向つて戦慄を強ふるに至る。)

〔群衆の聲

(これ等の聲は混亂して、大部分は無意味なる絶叫となる。)

○その家だ。

○その家だ。

○急げ。急げ。

○急がねば村が滅びる。

○白い鳥を殺せ。

○白い鳥を殺せ。

（牧者とその子とは眼を見合す。）

牧者。そこまで来たな。

子。ええ。もう直ぐやつて来ますぜ。

群衆の聲

（明かにその意味を解し得る程度に近し。）

○もう直ぐだ。

○あの老耄れの家はもう直ぐだ。

○あの旅人は白い鳥を殺せと云つた。

○さうしてあいつ等を追つ拂へと云つた。

○早く白い鳥を殺さう。

○早くあいつ等を追つ拂はう。

（十數個の石礫飛び來りて前庭に落つ。群衆の聲は次第に高く聽え來る。）

牧者。石礫ぢや。しつかりせい。

子。ええ。大丈夫です。

群衆の聲

（激したる調子。舞臺の上に強烈なる氛圍氣を造らむとす。）

○打つ殺してしまへ。
○追つ拂つてしまへ。
○白鳥を打つ殺せ。
○あいつ等を追つ拂へ。
○さうしなければ村が滅びるのだ。
○やつ付ける。やつ付ける。

〔右手より村民の群衆現はる。種々の服装。多く壯年の男なれども中には老人も交れり。皆激したる表情。前庭に闖入す。〕

子。(遮りて立つ。) 何しに來たのだ。

第一の村民。お前達を追つ拂ひに來たのだ。

第二の村民。白鳥を打つ殺しに來たのだ。

子。何故己達を追つ拂ふのだ。何故白鳥を打つ殺すのだ。

第三の村民。あの旅人が追つ拂へと云つたから。

第四の村民。あの旅人が打つ殺せと云つたから。

牧者。旅人と云ふのは何者なのぢや。

第五の村民。何者だか分らぬ。

第六の村民。何處から來たかも分らぬ。

第七の村民。何處へ往つたかも分らぬ。

牧者。そんな者の云ふことを何でお前達は信じたのぢや。まあよく氣を鎮めて考へて見るが好い。

第八の村民。何を生意氣な。老耄れ奴。(家の内部に入らむとす。) 子。(第八の村民を突き退く。) 何をしに家の中へなど這入らうとするのだ。

(そのうち群衆は前庭の右方に一團を作る。娘は白き鳥を守る如く中央に立つ。)

第一の村民。(白き鳥に眼を注ぐ。) さあ、この白い鳥を打つ殺すのだ。

第五の村民。ついでにこいつ等も打つ殺してしまへ。

第二の村民。村を滅ぼさうとしたのだ。

見えざる村民の聲。やつ付ける。やつ付ける。

(村民の二三人白き鳥に近寄る。稍恐れを抱きたる如き表情を示す。)

第三の村民。やつ、眞白だ。

第四の村民。もう死んでゐるのだ。

第六の村民。ちつとも動かないな。

第一の村民。何を愚圖々々してゐるのだ。

見えざる村民の聲。やつ付ける。やつ付ける。

(村民の二三人は牧者の子と娘とを突き退けて、白き鳥を奪はむとす。)

娘。(抵抗す。) 何をするんですねえ。これは私の鳥なんです。私の鳥どころぢやありやあしない。これは私の魂なんです。如何して如何してこの白い鳥を殺させて好いものか。あなた達が如何なことをしたつてこの鳥だけは殺させやしないから。

第七の村民。生意氣を云ふな。

第八の村民。それ。

見えざる村民の聲。やつ付ける。やつ付ける。

（一瞬間の混乱。村民の二三人は牧者の子の爲めに却けらる。）

子。さあ、この鳥が殺せるなら殺して見ろ。

牧者。何者だか分りもしない怪しい旅人の言葉を信じて、この家へ押掛け
て来るなんて何のことだ。この白い鳥は不思議な鳥でも何でもない。

いつも近江から来る鳥商人と、己の娘の黒髪を三本と換事したのぢや。

第一の村民。その黒髪が怪しいぞ。

第三の村民。何故もつと價のあるものと取り換へないのだ。

第四の村民。さうだ。さうだ。黄金や銀なら何でもないが、何故黒髪を望ん
だんだらう。

第六の村民。何しろその白い鳥を打つ殺さなければいけない。
見えざる村民の聲。やつ付ける。やつ付ける。

（群衆の激昂次第に高調に達す。）

娘。私の黒髪と取り換へたのが怪しいと云ふの。馬鹿々々しい。私の黒髪
がそんなに値打のないものと思つてゐるのですかねえ。まあ誰でも好
うござんす。あなた達の中で、一人でもこの黒髪に觸つた人があるで
せうか。（間。群衆沈黙す。）ほらご覧なさいな。今まで一人だつてこの黒髪
に觸つた男はありませんよ。それならこの黒髪を三本とこの白い鳥と
を取り換へても別段怪しむには及ばないでせう。

牧者。さうぢや。何も怪しいことではない。

第二の村民。何を云つたつて關ふものか。

第七の村民。白い鳥を殺してこいつ等を追つ拂へばそれで済むのだ。

見えざる村民の聲。やつ付ける。やつ付ける。

(二度一瞬間の混乱。)

牧者。(不圖右手を見る。) おお、馬に乗つて驛路を駆けて來るものがある。

(混乱一時に鎮まる。群衆悉く右手を望む。)

第三の村民。何だらう。

第六の村民。早い。早い。

第一の村民。瞬く間に近寄つて來る。

第四の村民。もう直ぐそこだ。

(長き間。期待の沈黙。)

牧者。早馬使ぢや。早馬使ぢや。

見えざる村民の聲。早馬使だ。早馬使だ。

(早馬使右手より出づ。二十七八歳の青年白馬に跨る。群衆の中にて馬を留む。)

早馬使。(喘ぎつつ。) 水を呉れい。水を飲ませなかつたので、馬の脚が遅くなつた。

(早馬使馬より下る。群衆驚きたる顔付にて白馬を圍繞す。)

牧者。(妻に。) それ、水を上げるのだ。

妻。はう。(早馬使に。) 暫くお待ち下さいまし。

早馬使。どうもご苦勞だな。

(牧者の妻は土間へ下りて奥へ入る。)

子。京に何か變つた事でもございましたか。

早馬使。(冷淡に。) いや、阿部晴明と云ふ方が歿くなられたのだ。娘。それは何時のことでございます。

早馬使。今日だ。(間。) 勝手な事を云ふやうだが水を早く。

(牧者の妻桶に水を満たして土間の奥より持ち出づ。盥にて馬に飲ます。早馬使は柄杓にて水を酌み、直ちに馬に乗る。)

早馬使。如何もお邪魔をした。

(早馬使は家の裏手を左の方へ馳せ入る。群衆遠かに騒ぎ始む。)

第一の村民。阿倍晴明さまがお歿くなりになつたのだ。

第三の村民。日本一の陰陽師だ。

第二の村民。それでは今日はもう生物の命を取ることは出来ないな。

第五の村民。今日はあの白い鳥も殺されなくなつた。

見えざる村民の聲。明日だ。明日だ。

(群衆次第に散す。遂に牧者の家族のみ舞臺に残る。)

娘。まあ好かつたこと。これで明日までは安心ですわね。お母さん、もう大丈夫ですわ。

妻。ほんとは彼の早馬使がここを通らなかつたら如何だらう。

子。馬鹿な奴等だ。(間。) 己がどの位強いかと云ふことをあいつ等は知らないと思える。

牧者。早くあの白い鳥を殺して置けば好かつたのだが。

妻。併しもうこの白い鳥は私のものなのですから、お父さんの思ふ通りにはまわりません。

子。それでもその鳥のお蔭でみんながどの位迷惑するか知れやしないよ。いや、己は何とも思はないせ。この鳥を殺したつて殺さなくたつて、そんな事が何になるものか。それよりはあの怪しい旅人が、まだこの村にゐるかも知れないから、捜し出してふん縛つて來やう。

牧者。待て。待て。その旅人を捕へたところで無駄なことぢや。村の人々の頭には何時までもその旅人の言葉が残つてゐて、その白い鳥を怖しいもののやうに思ふだらう。

子。併しこの儘にして置くと、まだこの上にどんなことを云ひ觸らすか分りませんせ。

牧者。それもさうだな。(間)併し今直ぐあの旅人を捜して歩くと云ふことは、あんまり村の人々に對する好い仕方でもあるまい。まあ夜になつてからにしたら好いだらう。

子。それでは夜になつたら、あの旅人を捜し出して來ませう。

(牧者の子と娘は、白き鳥に注意を集む。)

娘。兄さん。まあこの鳥は今の騒ぎも知らないやうに眠つてゐますよ。

子。さうだな。まるで死んでゐるやうぢやないか。

娘。ええ。あれで時々微かに眼を開けることがあるのですよ。さうして何

處を見るときもなく長い間さうしてゐるのです。(問。)ほらご覧なさい。眼を開けたでせう。

子。うん。微かに。

娘。併しああやつて眼を開けることはあつても、身體を動かしたことはありません。翼も動かしたことがありません。嘴も動かしたこともありません。

子。さうのやうだな。(問。)不思議な鳥だよ。己はこんな鳥を見たことがない。

娘。おや、それでは十年許り前に、こんな鳥が宋と云ふ遠い國から來たのをぞ存知ないのですか。

子。知つてゐることは知つてゐるが、見たことはなかつたのだ。

娘。ああ、また眼を閉つてしまひました。

子。うん。また眼を閉つたな。

(この時童謡の聲河の彼岸なれども極めて近く聴ゆ。)

童謡の第四

白き鳥が、

悲しさらに鳴いた。

鳴いたと思つたら、

蹠跟めいた。

やれ、何處へ、白い鳥。

〔靜かに靜かに風の音聽ゆ。〕

牧者。おお、またあの歌ぢや。

妻。ほんとは今日はよくあの歌を歌ひますねえ。

〔この時左手よりやや大いなる石礫烈しく飛び來りて娘の額に當る。娘倒る。子抱き起す。〕

牧者とその妻驚きて走り寄る。〕

牧者。如何したのぢや。

妻。まあ、額から血が流れて。

子。誰が投げ付けたのかな。

〔三人は同時に石礫の來りし方を見る。〕

牧者。〔子に。〕お前一寸往つて見て來い。

子。〔娘を牧者の手に移す。〕ええ、村の奴等には違ひないが。

〔牧者の子は足早に左手へ入る。〕

妻、娘は如何でせう。

牧者。眼を閉つた儘身動きもしない。

妻。水を飲ませませう。

牧者。うん。そこに丁度早馬使に上げた残りがある。

妻。さうですね。それではこれを。〔娘に水を飲ます。〕

牧者。おお、眼を開いた。

娘。(微かに歌ふ如く。) 白い鳥が。(やや長き間。) 悲しさをうに鳴いた。

(不安なる沈黙。)

(娘死す。)

牧者。如何やら呼吸が絶えたやうぢや。

妻。まあ如何しませう。當り所が悪かつたのですかねえ。

(牧者は無言にて娘の死骸を家の内部に置く。妻はその傍にて歎歎す。牧者の子左手より出づ)

子。誰も見えませんでした。

牧者。さうか。もう何處へか遁げて往つてしまつたのだらう。

子。さうだらうと思ひます。(娘の死骸に眼を注ぐ。) おや、妹は。

牧者。死んでしまつた。阿部清明さまが云はれた通り娘の天死は定まつた

ことなのぢや。

子。それに何處から飛んで來たとも知れぬ石礫で死ぬと云ふことが、私には非常に不思議に思はれます。

牧者。ふん。お前にはそんなことが不思議に思はれるのか。(間。) 己はそれよりもさつき旅人の云つてゐたと云ふ言葉が、如何やら本當のやうに思はれて來た。

子。何ですつて。

牧者。如何もあの白い鳥の爲めにこの村が滅びてしまふと云ふことが、本當のやうな氣がするのぢや。

子。あんな旅人の云つた言葉を、お父さんまでが本當にするんですか。

牧者。まんざら嘘とも思はれぬからなわ。

子。ふん。(娘の死骸に眼を注ぐ。) こんなことを云つてゐるよりは、娘の頬の血を拭いてやる方が、私達のしなくつてはならぬことのやうですな。
妻。ほんとにさうだつたね。

牧者。さうぢや。綺麗に拭いてやるが好い。

(三人は娘の死骸を圍繞す。悲哀の沈黙。)

一人の旅人左手より出づ。四十五六歳。顔の色淺黒く、眼の光鋭し。山僧の如き服装。聲音を盗みて白き鳥の傍へ忍び寄る。籠を除きて白き鳥を掴む。その儘片手に擁へ込みて、遁ぐるが如く左手へ走り入る。)

妻。さあ、これですつかり綺麗になりました。

子。(振り返る。) 何だか人氣勢がしたやうだつたが。(間。) やつ、白い鳥を盗

まれたな。

牧者。うん、さつき石を投げたのも屹とそいつぢや。

子。(左手を望む。) ああ、あすこに一人の男が駈けて往く。よし。

(牧者の子左手へ走り入る。)

牧者。(左手を望む。) おあ、白い鳥を擁へてゐる。

妻。倅は大丈夫でせうか。

牧者。大丈夫ぢや。大丈夫ぢや。あれを見るが好い。遠くつてよく見えぬが、まるで倅の相手にならぬやうな男ぢや。

妻。(左手を望む。) あれ、あれ、倅の足の早いこと。もう直ぐに追ひ付きませう。

牧者。二人ともあの草土手の蔭になつて見えなくなつた。

(二人はやや不安の表情にて左手を望む。)

妻。まだ出て来ませんね。

牧者。うん、如何したのだらう。

妻。ほんとに大丈夫でせうか。

牧者。さうだな。(間。) おお、出て来た。今度は倅唯一人ぢや。(間。) おお、

さうして白い鳥を擁へてゐる。

妻。まあ、白い鳥を。それでは取り返して来たのですね。

牧者。うん。さうぢや。さうぢや。

(二人は二度娘の死骸の傍に座す。)

妻。どうも私には娘が死んだやうな気がしません。

牧者。己も何だか嘘のやうな気がするのぢや。(間。) 外のものは何も入らぬ

から晴明さまと娘の爲めに神酒を上げやう。

妻。さうでございますねえ。

(牧者の妻奥へ入る。直ちに瓶子を持ちて出づ。居間の前の方の位置に粗末なる机を置き、その上に瓶子を載す。)

牧者。(羊の皮を見る。) その羊の皮を取つて呉れい。さうして娘の亡骸の上に

懸けて置け。

妻。(牧者の言葉の如く動作す。) 如何云ふ譯でこの羊の皮を懸けるのです。

牧者。娘の好きな白い鳥と一緒に渡つて来たものだから。

（牧者の子、白き鳥を擁へて左手より出づ。苦痛に堪へざるが如き表情。）

子。お父さん。やつと取り返して来ました。

牧者。うん、何處も怪我はしなかつたか。

子。ええ。怪我なんぞしやしません。（間。）併し取り返しては来たものの、

白い鳥はもう死んでしまひました。（白き鳥を籠の上に置く。）

牧者。如何して死んでしまつたのぢや。

子。それはかう云ふ譯なのです。あれから私が一所懸命で追つ懸けると、直ぐに追ひ付きさうになりました。よく見るとそれがあの怪しい旅人なのぢやありませんか。さうしてもう少しで追ひ付かうとした時、その旅人はこつちを振り向いて、そんなに欲しけりやあ呉れてやると云

つて、いきなり白い鳥を私に投げ付けたのです。

牧者。さうして旅人は。

子。何時の間にか林の中へ姿を隠してしまひました。私はまあこれがあれば好いと思つて白い鳥を抱き上げたのです。すると如何でせう。遁げる間に首を締めたと見えて、もう死んでゐたのです。

妻。まあ、ひどいことをする人だねえ。

子。ええ、ひどい奴です。併し私はその時始めて、この白い鳥が懐かしく思はれたのです。妹があんなに云つてゐたのも無理はありません。私はそれから草土手の上に登りました。さうして静かに流れてゐる河を眺めたのです。もう夏らしい光が野にも林にも満ちて、私は何だか大き

な力が私の身に迫つてゐるやうに思はれました。さうするとこの時、私は何處からともなく、お前はもう眼を覺まさねばならぬと云ふ聲を聞いたのです。

牧者。眼を覺ませと云つたのか。

子。(感激。) ええ、眼を覺ませと。(やや長き間。) その聲を聞いた時私の心はまるで瘡わらばらのやうに顫へました。さうして堅く白い鳥を擁へながら、驛路を歩いて來たのです。これから如何しやうと云ふことを考へながら。牧者。それでこれから如何すると云ふのぢや。

子。如何するか分りません。併しお父さんはもう私には關はぬと云ふことを誓はなければならなくなりました。(娘の死骸に近寄る。) ああ、妹は私よ

り先に眼を覺ましてゐました。疾うからあの聲を聽いてゐたのでせう。何時かもあの眠つてゐる村の人達と云ひました。眠つてゐる村の人達。さうです。村の人達はみんな眠つてゐます。

牧者。(その子の興奮を制す。) まあもつと靜かに話すが好い。

子。いいえ。もう私はかうやつてゐるのに耐へられなくなりました。

(牧者の子は面に感激の色を現はしつつ白き鳥の死骸を凝視す。)

(この時前よりはやや遠く童謡の聲を聽く。)

童謡の第五

白い鳥が、

河の縁で死んだ。

死んだと思つたら、

生き返つた、

やれ、何處へ、白き鳥。

(静かに静かに風の音聴ゆ。)

子。村の童までがあんな歌を歌つてゐるぢやありませんか。私は如何してもこの白き鳥を生き返らせなくつてはなりません。

牧者。ああ、お前もそんなことを云ふやうになつたのか。(間。)如何でもお前の勝手にして呉れ。

子。(瓶子の机に近寄る。) お父さん、この酒を飲んぢやあいけませんか。牧者。それは精明さまと。

妻。娘に供へたお神酒なのだよ。

子。(瓶子を取る。) 精明さま、お許し下さい。妹許して呉れ。(酒を飲む。)

牧者。如何したと云ふのぢや。子。(瓶子を擲つ。) あの旅人はこの白き鳥を殺してしまつたら、もう白き鳥は來ないものと思つてゐる。なあにこの白き鳥が一羽死んだつて何でもない。まだいくらでも海を渡つてやつて來るのだ。(白き鳥の死骸を取り上げて胸に抱く。) さあ、これからこの白き鳥が生き返るやうに。(蹠跟として右手に歩む。)